

【最難関】 ぼっち・ざ・ろっく！のギャルゲーで喜多ちゃんを攻略  
してみた【一年目攻略】

くじょう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アニメ『ぼっち・ぎ・ろっく!』放送終了から数年後に発売されたゲーム『ぼっち・ぎ・ろっく!〜Rock with You!〜』リズムゲームとしてリリースされた本タイトルはメインコンテンツの評価もさることながら、オマケとして実装された恋愛シミュレーションモードに異常なほど注力されていたことで好評を博した。

これはRWYにおいて最難関とされる喜多郁代ルートを一年目で攻略することを目指す『漢』の熱かりし戦いの記録である。

2023年2月12日更新

日間53位、週間40位、新作15位達成。

評価や感想を頂いた皆様に感謝。

育成パート編

目次

キャラメイク	1
“最強”の夜明け	6
楽器入手イベント	14
魂の名器 (1/2)	19
魂の名器 (2/2)	22
各種ステータスとスキルの解説	26
怪物の繭	29
定期テストと補習システム	34
世話焼きな姉妹 (1/2)	37
世話焼きな姉妹 (2/2)	40
バンド加入ルート分岐	45
残酷なまでの天才性	48
今後の方針	53
結束バンド集会	56
少女との邂逅	60
喜多との休日 (1/3)	67
喜多との休日 (2/3)	72
喜多との休日 (3/3)	77

## 育成パート編 キャラメイク

全方位に中指を立てる女とくっつくゲーム実況、はじまるよ〜！  
(淫夢語録は) ないです。安心しろよ〜。

さて皆さん、ぼっち・ぎ・ろっく！〜Rock With You  
！〜というゲームはご存知でしょうか。

そう、言うまでもなく数年前に世界規模で大バズりしたきらら作品であるぼっち・ぎ・ろっく！〜を題材にしたコンシューマーゲームです。このタイトル、主人公のぼっちちゃんがとんでもない子(オブラート)だったりオリジナル楽曲のクオリティが高かったり。ついでに原作者の方がC101でぼっちスペースを割り当てられたりと常に話題に事欠かない作品だったワケですが、それはゲームでも例外ではありません。

ぼっち・ぎ・ろっく！〜Rock With You！〜、通称RWYは音ゲーとしてリリースされながら、なんとサブコンテンツとしてかなり作り込まれた恋愛シミュレーションモードが実装されています。

発表当時Twitterで百合好きのアニキたちが阿鼻叫喚し、ヘテロ好きのアニキたちが狂喜乱舞する祭り状態になったのは記憶に新しいですね。投稿者は雑食なのでどっちもイケます。

百合も喰らう、ヘテロも喰らう。両方を共に美味しくと感じ、血肉に変える度量こそがオタクには肝要なのです。

範馬勇次郎もそう言っていました。  
話が逸れましたが、RWYの解説に戻りましょう。

このゲームにおける恋愛シミュレーション、所謂ギャルゲーとしての特徴はキャラクターの個別ルートに入るタイミングがそれぞれ三度存在することですね。

前半の育成メインパート中は個別パートに突入することはありませんが、最長3年間の共通ルートでは年に一度マスクデータの好感度

を参照し、要件を満たしていた場合個別ルートに派生します。

最終的にどのキャラのルートにも入れなければ酒クスニートエピソードが待ち構えているわけですが、今回は踏まないのでもまったく関係のない話です。

勘の良いアニキたちは既に気付いているかもしれませんが、1年目で個別ルートに入るのは誰が攻略対象であっても非常に難易度が高いです。

好感度管理がタイトなのは言うまでもありません。その上各キャラクターにはフラグを立てるための必須イベントがありますし、中には発生時期が限られたものまで存在します。

ですが、一年目攻略を難しくしている最たる要因は主人公キャラの初期ステータスや楽器・パートの適性がゲーム開始時にランダムで決定されることです。何なら特定のイベントを起こすために必要な幼馴染みや所持スキルまでランダムです。このゲーム運要素多すぎイ！

前置きが長くなりましたが、今回の実況では現状最難関かつ一年目攻略の確実なチャートが存在しないルートを目指にプレイしようと思います。

はい。みなさんご存知、喜多郁代ルートです。

彼女は共通ルート開始時点で山田リヨウへの好感度が振り切れている上、一年目の文化祭イベント前後から急激にぼっちちゃんへの好感度が跳ね上がるという曲者キャラです。

喜多郁代ルートに入ろうとしたものの一向に個別ルートフラグが立てられず、酒クスニートと化したアニキたちがごまんといっているのはこのせいなんですわね。

たとえ二年目攻略、三年目攻略であっても喜多郁代ルートだけは一筋縄ではいきません。

ですが嘆いても仕方のないことなのです。後藤さんのTNPはそれだけデカいのです。(6敗)

ともかく、主人公キャラの設定に行きましようか。この後は楽しい楽しいリセマラの時間が待っていますから、一分一秒も無駄にできま

せん。

主人公の苗字は入力速度を考慮して保浦<sup>ホモ</sup>とします。RTAではないのでそもそも考える必要はありませんが、趣味みたいなもんです。カタカナだと入力できない仕様だったので漢字表記にしておきました。

また、下の名前はあまり表示されることがないのでランダム生成機能を使います。

主人公のフルネームは保浦寛和<sup>ホモカンナ</sup>となりました。

たまに驚くようなキラキラネームが生成されるので少し期待していたんですが、狙うほどでもないので続行で。

容姿は以前作成してプリセットに保存しておいたものを使用しましょう。そうこだわったモデルではありませんが、中性的な見た目が気に入っています。

髪や目が赤系の補色であるエメラルドグリーンなので、ちょうど喜多ちゃんとの相性も良いですね。

最後に趣味、誕生日といったプロフィールの設定です。とはいえ後者は誕生日イベントの発生タイミングにしか関与しませんので、きちんと考えるべきなのは設定によってステータスの伸び率が変動する前者だけです。

RWYにおける趣味はポ○モンにおける性格と同義なので妥協は許されません。今回は知力の伸びに補正がかかる『読書』を選択します。スコアや教本といった本系アイテムの効果上がるのもうまあげです。覚えておきましょう。

ここからリセマラに入っていくわけですが、厳選する要素は所持スキルのみと言っても過言ではありません。

私が組み立てたチャートによると、レアスキルの『天性のカリスマ』とデバフスキルの『遅刻癖』さえ共存すれば多分恐らくきつと喜多郁代ルート一年目攻略が可能です。

もしそれを確実にする条件があるとすれば山田リョウが幼馴染みであること、もしくは高いボーカル適性・ギター適性の所持でしょうか。

まあ、そこまでの好条件は中々お目にかかれないので、出たらラツキー程度に思っておくことにします。

それでは早速主人公キャラクターの生成と洒落込みましょう。画面が明転したらひたすらに祈りながらステータス画面を開きます。

お願いします何でもしますから！（何でもするとは言っていない）

【所持スキル】

『天性のカリスマ』『遅刻癖』

はい一発。（20敗）

数値も悪くない——どころか大満足ですよこれは。

初期ステータスは基本的にDからFの三段階で、DランクとFランクが一箇所ずつ確定しています。『基本的に』と言うのは、天才的だとSランク、壊滅的だとGランクが出るためです。実際にこの目で見たことはありませんけど。

保浦くんは本系アイテムで上げにくいV o. 適性がDランクになっているのが偉いですね。G t. 適性がFランクなのは悲しいところですが、地道な練習と本によるドーピング、そして『天性のカリスマ』で十分カバーできる範囲です。頑張ってもらいましょう。

【ステータス】【適性】

体力	E		V o.	D
知力	E		G t.	F
技術力	E		B a.	E
社交力	E		D r.	E

ステータス確認も済んだところで、お次は幼馴染みの確認です。幼馴染みはテキストからすぐに判別できるので、メニュー画面を閉じましょう。

中学校の入学式を終えて幼馴染みと共に下校する場面からゲームが始まるわけですが、ランダム要素が強いタイトルであるせいか桜の花びらが舞う演出を見る度に胸を躍らせてしまいます。

——さて、今回の幼馴染みは一体誰なのでしょう。

『保浦寛和は幼馴染みの伊地知虹夏、山田リヨウとともに帰路につくところだった』

.....  
は？  
!



## “最強”の夜明け

中学校の入学式が終わった。

校門の前で群れを作る同級生たちは、それぞれの親を伴って帰路についていく。

うざったい春風が髪を揺らすのを感じながら、俺はそんな彼らの様子を遠巻きに眺めていた。

ぶかぶかの制服を被るようにして着ているのは俺と同じだった。新生活に期待と不安を抱いているのも俺と同じだった。

ただ俺には、あんな笑顔で話を聞してくれる親だけがいなかった。それが無性に悔しくて、思わず唇を噛む。

父さんが今も生きていたら、きつとこんな思いをすることはなかったんだろう。

そんな“もしも”を想いながら、あの群れに加わる自分の姿を脳裏に描く。ひどくぼやけた輪郭が滑稽で、俺は小さく息を吐いた。

母さんが来てくれないことなんて分かっていた。

あの人が愛していたのは父さんだけで、はじめから連れ子の俺になんて興味がなかったから。

だから父さんの死後に俺との家族ごっこをやめるのは当然だと思っただし、十分な生活費を与えてくれるだけで有り難いことなんだと考えるようにした。

世の中には離婚後に養育費を出さない親もいると聞くし、それと比べれば母さんは聖人みたいなものだ。

己に言い聞かせるように瞑目して、色々なものから逃れる。現実から。思考から。そして普通の家族の有り様から。

そうしている内に何もかもが虚しくなって、死ぬのが待ち遠しくなった。自殺をする勇氣もない癖に、ただ父さんに会いたいという思いだけが募る。

門出を祝う日に暗いことばかり考えていると、なんだかその内いたたまれない気分になった。

「……帰るか」

両手を余った袖ごとポケットに突っ込んで、足早に学校を後にしようとして小走りになる。

校門に近付くたび知らない親子の顔が増えるせいか、歩を進めるごとに頭の中で電子音が鳴った。

うるさくてうるさくておかしくなりそうだ。メトロノームのように一定間隔で鳴り続ける電子音は、まるで時限爆弾のカウントダウンみたいに聞こえた。

3、2、1。3、2、1。3、2、1――。

「――ちよつと、カンナくん！」  
「え」

校門を出る寸前に一際大きな音が鳴る。しかし頭の中で信管が炸裂することも、俺が最後の一步を踏み出すこともなかった。

誰かが俺の名前を呼んだせいだ。自分の世界に入っていたから、思わず間抜けな声が漏れた。見れば、二人の幼馴染み――虹夏とリヨウが背後から俺の腕を掴んでいる。

「なくに勝手に帰ろうとしてるの！一緒に写真撮ろうって言ったじゃん」

「……あれ。そうだったっけ」

「正直私もあんまり覚えてない」

俺とリヨウが顔を見合わせてそんなことを言うと、虹夏はわざとらしく肩を落としながら「この自由人どもめ……」と呻いた。

そうしていたのも束の間。彼女はすぐに立ち直って、トレードマークのサイドテールを揺らす。明るい笑顔が眩しかった。

虹夏は俺の左腕を掴んだまま昇降口の方へ歩を進める。当然右腕を掴んでいたリヨウは俺に引つ張られる形になった。

中々にシユールな光景だったのだろう。そこかしこから視線を感じる。

「二人ともこっち来て！お姉ちゃん待ってるから」

「いや、引つ張られなくても歩けるって」

「だって離したら逃げるじゃん。リヨウもちゃんとそっちの腕持ってるね！」

「ラジャー」

「……信用ないなあ」

苦笑しながらため息をつく。俺の記憶が正しければ、少なくともこの2人から逃げたことはないのに。

虹夏に連れられるまま、俺は背後のリヨウを見やった。入学式がよっぽど退屈だったのか気怠そうにあくびをしている。こちらの視線に気付いた彼女は「何？」と首を傾げた。

「いや、こういう時にリヨウが協力するのは珍しいなと思って。中学に上がって心境の変化でもあった？」

「別に。カンナを捕まえたら後でご飯奢ってくれるって虹夏が言ってたから」

「ああ……。お前はずつと変わらなくて安心するよ」

「そんなに褒められると照れる」

「はいはい」

他愛のない会話を続けているとすぐに虹夏の姉である星歌さんの姿が見えた。バンドでギターを弾いている姿が強く印象に残っているせいか、フォーマルな服装の彼女を見るのは新鮮な気分だ。

星歌さんは俺たちの姿を認めると、団子みたいに連なった様子を見てジト目になった。

「お前ら何してんの……？」

「さあ……電車ごっこ、っすかね」

「ガキかよ」

「そう言わんでください。俺も恥ずかしいんです」

うなだれる俺に星歌さんが微笑む。そんな表情を見て『やっぱり少し丸くなったかな』なんて思った。

数年前までの星歌さんには『御茶ノ水の魔王』の異名通り威圧感があつたし、こんな風に虹夏の晴れ舞台に顔を出すこともなかった。

それが最近では一人の俺に気を遣って食事を奢ってくれたり、虹夏共々ライブハウスに連れて行ってくれたりと、妹の虹夏だけでなく他人である俺の世話まで焼いてくれているのだ。

そんなこともあって、俺は星歌さんには頭が上がりなかった。

「写真撮るんだろ。早く並べよ」

「はい。ほらリヨウ、ちゃんと立ってくれ」

「え〜……」

軟体動物みたいな動きを始めたリヨウをなんとか直立させ、でかでかと『入学式』と書かれた立て看板の前に連れて行く。

その間虹夏は珍しいものでも見たという顔で俺を見ていた。

「カンナくんってお姉ちゃんの言うことには忠実だね。普段はリヨウに負けず劣らず面倒くさいのに」

「ああ。俺は星歌さんの忠実な僕だからな。星歌さんがやれと言えば臓器の一つや二つすぐに売り飛ばしてくるし、その金で新しいギターでも献上する次第だ」

「そんな爽やかな顔で言うセリフじゃないよ!？」

キレのあるツツコミを受けて虹夏と笑い合った。

そうこうしている内にスマホのカメラを準備し終えたらしい星歌さんが俺たちに合図を送る。

「お姉ちゃんも一緒に撮ってもらおうよ!」

「いや、私はいいんだよ」

と、伊地知姉妹が小競り合いを繰り広げた後。結局星歌さんが折れて四人の集合写真を撮った。



それから少し駄弁って空が茜色に染まり始めた頃。俺たちは誰からともなく歩き出して学校を後にした。

「お姉ちゃん、用事があるって行っちゃったけど何してるんだろ」

「宇宙人と交信してくるって言ってた気がする」

「そんなわけないでしょ」

数歩だけ前を歩く二人はつい先ほど別れた星歌さんの話をしていく。

俺はというと足を止めて振り返り、もう十メートルは離れたであろう校門をじつと見ていた。

一人であそこを越えようとした時、あんなにけたたましく響いていた電子音は鳴りを潜めている。

言うまでもなく、アレを止めてくれたのは虹夏とリョウ、そして星歌さんだ。

やっぱり、彼女らという間だけは孤独を忘れられる。頭の中の電子音も止まる。

本当に恥ずかしい限りだが、俺の本当の家族はあの三人なんじゃないか。なんてロマンチックなことが頭に浮かんだ。

ともかく、俺には戸籍だけが家族関係を証明する母親よりも、事実として他人である彼女たちの方がよっぽど大切だった。それだけは確かなことだ。

「……………」

そんなことばかりを考えると、みんなと少しでも長く一緒にいたいという感情が溢れ返る。

そのためにはどうしたらいい。どうしたらみんなとずっと一緒にいられるのだろうか。利己的な自問を繰り返した末、辿り着いた結論はひどく単純だった。

思い至った今となつては、むしろ何故これまでそうしてこなかったのかと不思議に思うくらいの解答。

そうだよ。俺もロツクをやればいいじゃないか。

「カンナくん！ どうしたの〜！」

遠くから名前を呼ばれてはつとした。思っていたよりも長い間立ち止まっていたらしい。虹夏とリョウとの距離はいつの間にかかなり離れてしまっていた。

虹夏が大きく両手を振っているのが見える。俺はそれに応える代わりに全力でダツシユをして、逆に二人を追い抜かした。

「……………虹夏、リョウ」

息を切らしながら二人の名前を呼ぶ。虹夏は俺の奇行に狼狽していたし、普段無表情なりョウでさえも、少し心配そうな顔でこちらに手を伸ばしていた。

彼女らに笑いかけ、言外に大丈夫だと伝えた後。俺はひとつの問い

を口にした。

「二人とも中学で部活やるつもりある？」

「ない」

虹夏とリヨウの、調子の違う声が揃う。二人は互いに顔を合わせて微笑むと、それぞれの理由を述べた。

「資料を読んだ限り面白そうな部活はないし、面倒だからいい。家で楽器弾いたり音楽聞いたりする方がよっぽど有意義」

リヨウはそう言って息を吐き。

「私はちよつと興味あるんだけど、部活入るとドラムの練習する時間がなくなっちゃいそうだから。お姉ちゃんのお世話もしてあげなきゃだし」

虹夏はそう言っつて苦笑した。

「そっか。……そうだよな」

二人の反応は想像通りだった。

彼女らはもうとつくに、学校生活以上に打ち込めるモノを見つけている。そんな人間が今更部活動になんて励もうとするわけがないのだ。

虹夏はドラム。リヨウはベース。星歌さんはギター。揃いも揃って口を開けばロックにバンドだ。

俺には楽器も音楽も分からないが、一緒にいたい人間たちが愛しているのは結局のところロックなんだ。だったら、俺もやるしかないだろ。

「——なら決めた。俺もロック始めるよ」

二人が目を見開く。

俺は畳み掛けるように言葉を紡いだ。

どうせやるなら目指すのは一番だ。一番のバンドマンになって、一番のバンドでライブがしたい。

そんな思いを二人にぶつける。

「みんなより何年も遅れてスタートすることになるけど関係ない。死ぬほど練習して誰より努力して、一番上手くなってやる。それで、それでさ………！」

一度立ち止まって呼吸を整える。素人未満の俺がこんな荒唐無稽な夢を口にするのは憚られたが、それでもこの熱を止められる気はしなかった。

「いつか、お前らと最強のバンドを作りたい」

夕陽で灼けた空の下。口をついた俺の夢は、足元から伸びる影よりも長い沈黙を作り出した。

二人とも呆気に取られたような表情だ。心中では無茶を言いすぎたか、と少しだけ後悔が滲み始める。

沈黙を破ったのは、意外にもリヨウだった。

この中で最もロックに熱を注ぐのが彼女だ。もしかしたら怒られるかもしれないと思って身構える。

しかしそれは徒労に終わった。

「最強、いいね。すごく漠然としてるけど悪くない」

「うん……うん！ 私もまだリヨウと一緒に演奏できるほど上手くないけど、いつか絶対に作ろうよ！ 私たちだけの最強バンド！」

くつくつと笑うリヨウに続いて、スキップでもし始めそうな調子の虹夏が俺の前に飛び出す。

俺は二人の答えを何度も反芻していた。

思い付きみたいな勢い——というか、本当に思い付きで言ったような浅はかな考えなのだが。彼女らはそれを笑わず、あまつさえ了承してくれた。

嬉しいやら気恥ずかしいやらで情緒がめちやくちやだ。体の芯にはまるで一世一代の告白でも終えた後のような高揚感があった。

「……何というか、舞い上がってらしくないことをした気がする。顔熱くなってきた」

「急に走り出したと思ったら『俺もロック始める！』だもんね。こっちもびっくりだよ」

「うん。走ってるカンナの顔、今日一番面白かった」

「言うなよもう……」

ニヤニヤとする二人のせいで締まらない空気になってしまったが、

不思議と嫌な感じはなかった。

それはきつと、虹夏とリヨウの表情がこれまでに見たことのないくらい嬉しそうだったからだ。

初めての通学路を帰る間、俺たちはずっと笑顔を湛えながら未来の話に花を咲かせた。



## 楽器入手イベント

……すみません、あまりの上振れ様に取り乱してしまいました。ご覧の通り保浦くんの幼馴染みは伊地知虹夏、そして山田リヨウの二人です。

狙いのリヨウが幼馴染みになった上、虹夏まで付いてきたのは僥倖。

RWYにおける幼馴染みキャラは基本的に一人だけなのですが、最初に抽選された幼馴染みが虹夏かりヨウだった場合にのみ、五割の確率でその相方も幼馴染みになります。

確率としてはそこまで低くないので、複数回プレイしたことがあるアニキなら一度は見たことがあるかもしれませぬ。

虹夏・リヨウ幼馴染みルート——通称二股ルートにはいくつかのメリットとデメリットが存在します。

それらをひとことでまとめるとすれば、育成パート中に星歌さんを含めた三人分のイベントが発生するということに尽きるでしょう。

イベントによる数値の伸びは単純計算で通常の三倍になりますが、一方でバッドステータスを引く確率も通常の三倍。上振れば天国、下振ればそれなりの地獄を見ることになるわけです。

安定をとるなら虹夏幼馴染みルートと言われる所以はこれですね。リヨウが幼馴染みの場合、かなり所持金が溶けますし……。

それでもリヨウ幼馴染みルートを狙っていたのはきちんと理由があつてのことです。

喜多ちゃんを攻略する上では特に重要なことなので、時が来たらお話しします。

さて。二股ルートの解説を挟んでいる内に画面では保浦くんがロックを始めることを宣言しました。

楽器の経験はないようですが、一番のバンドマンになるそうです。たまげたなあ。

ですがその心意気や良し。私が君をつよつよバンドマンに育ててさしあげましょう。そうと決まれば早速育成です。

R W Yでは練習コマンドを選択することによって対応したステータスが伸びていきます。

ランニングを選べば体力、勉強を選べば知力、ギター練習を選べば技術力とG t・適性といった具合ですね。

とはいえ楽器入手イベント前は基礎ステータスを伸ばす練習しかできないので、序盤はそちらに集中することになります。

とりあえず、保浦くんには楽器を入手するまでひたすら走り込みをしてもらいましょう。

ここで『趣味を読書にしたのにランニング?』と思ってしまったアニキ。体力なめてんじゃねーぞ。

このゲームは初期段階だと平日は一日に一度、休日は二度行動することが出来ます。ただし一日の行動回数は主人公の体力依存で、一定以上の数値があれば増やすことができるんですね。

そんなわけで、序盤の体力上げはかなり重要です。行動回数が一度増えるCランクになるまでは馬車馬の如く走り回りましたよ。

努力 未来 A B E A U T I F U L S T A Rです。くれぐれも交通事故にだけは気を付けるように。

ランニングを押し続ける画面を流し続けても仕方がないので、何か起こるまで倍速します。



『今日は虹夏とリヨウが家に遊びにくることになっていたので、掃除をするために少しだけ早起きをした』

……おや、イベントが発生したようです。掃除をするために早起きをしたというテキストからして恐らく楽器入手イベントでしょう。

あれから約二週間ランニングを叩き続けて体力がCランク寸前というところまで伸ばせたので、タイミングとしてはベストですね。

選択肢が表示されるので、そこまで読み進めます。

『物置き部屋の扉を開けて掃除機を引っ張り出そうとした時、偶然部屋の隅に鎮座しているモノに気が付いた。あれは———』

はい。これですね。上から順に『ギター……？』『ベース……？』『ドラム……？』と三つの選択肢が表示されます。

これらは主人公の父親、もしくは母親が使っていたものという設定です。

どうして楽器が全種類置いてあるのか、とか突っ込んではいけません。そういう仕様です。

ここで選んだ楽器が主人公のメインパートになります。選ばなかった楽器でバンドに参加することも可能ですが、基本的にはおススメしません。

メインに選んだ楽器には適性の成長率に一割程度の補正がかかるためです。

この補正は本系アイテムによる強化にも乗せることができるので、読書が趣味の保浦くんにはもちろん、そうでない主人公にとっても重要な選択です。

ちなみに(V.O. 適性の成長率に補正をかける選択肢は)ないです。保浦くんのステータスを見た時に「V.O. 適性は本系のアイテムで伸ばしにくい」と言ったのはこのためだったんですね。

ここで『マイクスタンド……？』(迫真)ができたら喜多ちゃん攻略の幅も広がったと思うんですが、ないものは仕方ありません。

保浦くんにはギターを弾いてもらうことにします。

『間違いない。あれはギターケースだ』

おっ、そうだな (適当)

『慎重にケースを開けると、中にはテレキャスタータイプのギターと一枚の写真が入っていた。所謂アール写というやつだろうか。その中心には若い頃の父さんの姿があった。勝手に触っていいものか、少し迷いながらも掃除機と一緒にギターケースを持ち出した』

このギターはどうやら保浦くんの父親がバンドを組んでいた時に使っていたものようですね。それなら息子に愛機を受け継いでほしいと思っっているに違いありません。遠慮なく拝借していきましよう。

既にお察しのアニキもいらつしやるとは思いますが、保浦くんは喜

多ちゃんと同じギターボーカル型で育成をしようと考えています。

G t. 適性ぶっぱにはしないのか、という質問が予想されるので、私の見解を述べておきます。

ご存知の通り、現状喜多ちゃんの一年目攻略において最適解と目されているのは、G t. 適性にリソースを全ぶっぱしてぼっちちゃんの代わりに結束バンドのリードギターを担当するというプランです。

一見フラグクラッシュヤーのぼっちちゃんを心配することなく喜多ちゃんを攻略することができる優れたプランに見えますが、実は大きな落とし穴があります。

結束バンド結成直後のオーディションやライブはギターヒーロー状態のぼっちちゃんありきの難易度設定であり、彼女抜きでルート分岐のタイミグまで結束バンドを存続させることは極めて困難です。

ギターヒーロー状態のぼっちちゃんはG t. 適性S、技術力カンストというトンデモスペックです。

共通ルート序盤の段階で主人公をこのレベルまで仕上げるのは不可能といって差し支えないですし、ぼっちちゃんがない結束バンドに関わるのは酒クスニートエンドを選ぶのと同義と言えます。

それにも関わらずこのプランが未だに一定の支持を得ているのは、偏に喜多郁代一年目攻略の初の成功者がこれを採用していたためです。

ただしご本人もSNSでおっしゃっていましたが、このプランは初手でG t. 適性Sを引かなければまず完走できません。

もしこれが凡人の主人公でも再現可能だとしたら、喜多郁代一年目攻略のチャートはとくに確立されているでしょうね。

ともかく、喜多郁代一年目攻略のためには原作通りの結束バンド結成が必要なことはご理解いただけたかと思います。

ギターボーカル型の主人公でどのように喜多ちゃんにアプローチをかけていくのかは、結束バンド発足後をお楽しみに。

そうこうしている内に保浦くんの家に来客があったようです。入って、どうぞ。

『それから一時間後。虹夏は約束の時間ぴったりに到着して、リョウ

は三十分遅れで到着した。先ほど見つけたギターを二人に見せると、誰からともなく星歌さんに弦を張り替えてもらおうという意見が出る』

あ、ここでも選択肢ですネ。

主人公の家で発見される楽器は年季が入ったもので、使用できる状態にするために数千円のメンテナンス費が必要です。ギターの場合には三千円だったはず。

保浦くんはまだ中学生なのでアルバイトをすることができませんし、月に一度支給されるお小遣いから初期費用を捻出しなければなりません。三千円とはいえ序盤だとかなり手痛い出費です。

しかし虹夏が幼馴染の場合、星歌さんに頼むことで無料で楽器が使用可能になります。

浮いたお金でスコアや教本などを買えば効率よくステータスを伸ばすことができるので、(頼まない理由は) ないです。

二つ表示された選択肢の内『星歌さんにお問い合わせする』を選びましょう。

『せっかくだし頼んでみよう。虹夏は固定電話で星歌さんに連絡を取ると、弦の張り替えを頼んでくれた。快く了承してくれたらしい。あとでお礼をしよう』

星歌さん、オナシヤス！

一日から二日程度変動する場合がありますが、おそらく三日後には使用可能な状態のギターが手に入ると思っています。

それまでは体力をCに上げることには専念しましょう。ギターが返ってくるまでもう一度倍速です。

## 魂の名器（1／2）

今朝は目覚まし時計が鳴るよりも早く目が覚めた。寝坊常習犯で虹夏によく怒られている俺がこうもスッキリ目覚められるなんて、珍しいこともあるものだ。

心なしに身体の調子もいい気がするし、久々に明るい気分を迎えることができた。きつと普段よりも睡眠の質が良かったんだろう。

「……ランニングのおかげかな」

手近な窓を開けながら呟く。

二週間前、入学式からの帰り道。虹夏とリョウにロックを始めることを宣言した俺は、以来毎日のように楽器の練習に励んでいる——なんてことはなかった。

そもそも楽器なんて持っていないし、計十万円を越える機材をすぐに用意できるほどの余裕もない。

あんな啖呵を切っておいて恥ずかしい限りだが、楽器を用意することができるのは早くても半年先になるだろう。

毎日の走り込みはそのせいで行き場を失った熱を発散するための手段だった。

まあ、何をするにしても身体が資本だというのはよく聞く話だ。今後死に物狂いで練習することを考えれば、基礎体力を付けておいて損はない。

俺は脳裏でどのように楽器を手に入れるか考えながら、今日一日のプランを組み立てていた。

午後には虹夏とリョウが家に来るから色々と準備をしておく必要がある。

とりあえず買い物は行っておいた方がいいだろう。リョウに食べ物を持たられるのは目に見えているし、虹夏も菓子類があれば喜ぶはずだ。

そう思い立って枕元に置いた時計を一瞥する。液晶に表示された無機質なフォントの数字は、午前七時半を指していた。

「スーパ―はまだ開いてないな。コンビニだと値段が高いし、しばらく

く掃除でもして時間潰すか」

目にかかった前髪を指で流しながら、一人で使うにはやたらと大きいキングサイズベッドから下りる。

クローゼットから適当に選んだ服を着て、掃除機を取りに物置部屋へ向かった。

もしまだ俺に両親がいたら、この部屋は物置部屋ではなく俺の自室にでもなっていたのかもしれない。

俺があのだだっ広い寝室を使うことはなかっただろうし、自分の世話をする苦労も当分知る必要はなかっただろう。

頭の奥で音が鳴る。俺はそれを振り切るようにして物置き部屋に足を踏み入れた。

「掃除機は——あつた。こいつも結構古そうだし、そろそろ買い替え時か……」

もう十年は使っているであろう古臭いデザインの掃除機を叩く。

楽器を購入するためにも出費は抑えたいところだが、こればかりは仕方がない。せめてできるだけ寿命が長く続くことを祈るばかりだ。

重い掃除機を持ち上げて物置き部屋を後にしようとする。その時背後から何か倒れる音がした。

コードがどこかに引っかかっていたのだろうか。立ち上がる時にしっかりと周りを見ておくべきだった。

振り返るとコートハンガーを起点にして様々なものがドミノ倒しになっている。

しかし俺の目を引き付けて止まなかったのは、部屋の惨状ではなく一つの箱だった。

アタッシユケースの横幅をそのまま伸ばしたような形状だ。一面マッドブラックで装飾のない外見からは品のある高級感が感じられる。

ガラクタバばかりの部屋の中で、その箱は異質な存在感を放っていた。

「……なんだこれ」

倒れた物を元に戻すより先に、俺はその箱に手を伸ばしていた。

持ち上げてみるとそれなりの重量感がある。五キ口前後、といったところだろうか。周りのものを倒さないようにしながら部屋の入り口まで持ち出す。

十分なスペースが確保できたところで箱を床に置いた。開閉をロックしている二つの金具を外すと、緊張感で汗が滲む。

「……………」

心臓と呼吸の音だけが世界を支配していた。不思議と電子音は一切しない。一度瞑目して深呼吸を挟み、箱に手をかける。

「これは——」

その中身はまさしく俺が欲していたものだった。なるほど、頭の中の音が止まったのにも納得がいく。

手が震えた。心が震えた。

そこに鎮座していたモノは、愛する父の魂だった。



## 魂の名器（2／2）

「ゴディバのチョコとハーゲンダッツある？」

「あるわけくない？」

集合時間後から三十分後。ようやく家に到着したりヨウのために玄関の鍵を開けてやると、彼女はまったく悪びれもせずと言ってのけた。

心臓に毛でも生えているのか。遅刻した上に高級菓子まで要求されるのは流石に予想外だった。

思わず苦笑しながら来客用のスリッパを出す。

「とりあえず上がれよ。虹夏はもう来てるから」

「うん。お邪魔します」

リヨウを伴って廊下を進む。打ちっぱなしの壁が無骨な印象を与えるリビングでは、虹夏が呆れたような顔をしながら待っていた。

「遅いよりヨウ。自分の家なら遅刻しないだろうと思ってカンナくんの家に集まったのに、リヨウが遅れてきたら意味ないじゃん」

「ごめん。どうしても最高の卵かけごはんが食べたかったから田植えをしてて」

「嘘が下手すぎるだろ。……いや待て。俺って遅刻に関してはリヨウより信用なかったのか？」

「うん」

言うのと、虹夏とリヨウは互いに目を合わせて頷いた。流石にシヨツクだ。

もちろんわざと寝坊しているつもりはないが、今後は一層生活リズムに気を付けようと思った。

「そうか……ありがとうリヨウ。お前のおかげで目が覚めた。俺、真人間になれるように頑張るよ」

「なんだろう。お礼を言われてるはずなのにまったく腑に落ちない。馬鹿にされてる……？」

「そんなことないって。ほら、これでもお食べ」

言いながら、ザラメでコーティングされた一口大のドーナツをリヨ

ウの口に放り込む。

虹夏はそんな俺たちの様子を横目に何かスケッチブックに書き込んでいた。

しばらくして出来に満足したのか「よしっ」と小さくガッツポーズをしてこちらに向き直る。

「はいはい、二人とも注目〜！」

立ち上がったって挙手する虹夏に目をやると、彼女は俺たちに『本日の議題』と書かれたページを見せた。丸っこい文字や余白のイラストが愛らしい。

胸を張った虹夏はどこか気取った感じで言った。

「ごほん。本日集まってもらったのは他でもありません。……カンナくん〜！」

「え。はい」

突然指名されたことに驚いて、テーブル中央の菓子に伸ばしかけた手が止まる。

「もう二週間前くらいかな。入学式の帰りに私たちとバンドやりたかって言ってくれたでしょ？」

「ああ。『最強のバンド』なんて口走ったもんだから、たまに思い出して恥ずかしくなってる」

俺が頬を掻きながら目を逸らすと虹夏は朗らかな顔で笑った。

「私もリョウもすごく嬉しかったんだけど、だからこそ話合わなきゃいけないことがあって。それが……」

虹夏はそう言っただけでスケッチブックのページを捲る。

誇らしげな彼女を見て俺はまた背中が痒くなる思いだったが、確かに二人とバンドを組むなら話し合う必要があるというのは本当だった。

「こちら！ 最強バンド（仮称）担当パート問題！」

「……最強バンド擦られすぎだろ。泣くぞ」

「ぷっ……」

リョウが噴き出したことに気付かないフリをしながら続きを促すように虹夏を見やる。

俺の意図はお見通しということだろうか。彼女は苦笑しながら続けた。

「私はちよつと前からドラムやってるし、リョウもベース弾いてるでしょ？ だからカンナくんと私たちがバンドを組もうとすると、自然とギターかボーカルをやってもらうことになっちゃうんだよ」

「まあ、そうだろうな」

あくまで想像でしかないが、一から楽器を始めた人間が人並みのレベルに到達するまでにはそれなりに時間がかかるものだろう。

効率を考えればまだ担当のいないギター、ボーカルに俺を据えるのが論理的に正しい。

が。虹夏の優しさはそれを良しとしないらしい。

「だけど、最初からカンナくんを選択肢がないのはちよつと違うかなって思ったんだよね。今日こうして集まってもらったのは、みんなできちんと話し合ってパートを決めたかったからなんだ」

そう言つて虹夏は上機嫌そうに笑う。素直に礼を言うところ「まあ、実際バンドを組むのはいつになるか分からないけどね」なんて照れ隠しみたいなことを言つて見せた。

彼女の人徳はこういう所にこそ表れる。たまにお人好しが過ぎることがあるのではないかと思うこともあるが、俺はそんな虹夏の性質が嫌いではなかった。

「……でも、杞憂だったな。別に二人に合わせたワケじゃないけど、今俺がやりたいと思つてるのはベースでもドラムでもないから」

二人に断つて一度席を立つ。

俺は今朝見つけたばかりのギターケースを手にしてからリビングに戻った。

「これは？」

「ギターだよ。父さんが昔使つてたのを見つけた」

「えっ、見たい見たい！」

今まで静かにやりとりを聞いていたリョウが身を乗り出す。彼女が俺の左側に肩を並べると、反対側に虹夏が躍り出た。

中身を知つた今、俺にはこの真っ黒な箱がまるで棺のように見え

た。蓋を開くと毛足の短い絨毯のような緩衝材の上に父の遺品が横たわっている。

エメラルドグリーンテレキャスター。波打つような木目は美しい南国の海を想起させ、ピックガードの黒がいいアクセントになっていた。

俺はケースの内蓋に付いたポケットから父さんの写真を取り出す。複数枚ある内、路上ライブを撮影したものを二人に見せた。

「父さんはギターボーカルをやったみたいなんだ。だから俺は二人とバンドを組むならギターもボーカルもやってみたい。……まあ、初心者の俺にフロントマンを任せるのは不安だと思うけど」

言いながら小さく笑った。

その声色か、もしくは顔色にでも表れていたか。相對する二人の目は俺の自信のなさなんて見透かしているような目で、まっすぐにこちらを見据えていた。

俺の憂慮を否定する言葉には一切の迷いが無い。

「そんなことない。入学式の日、カンナは誰よりも上手くなるって言ってた。だから大丈夫」

「うん。カンナくんが断言したことを絶対にやりとげちゃうのは、私たちが一番よく知ってるしね」

「……そうか。ありがとう」

リョウの微笑と虹夏の悪戯っぽい笑顔が目には焼き付いた。俺の不安には、それが言葉よりもよく効いた。

二人が信じてくれるなら、二人ができると言ったなら。俺はもうギターと歌唱を極めるしかない。退路は既に断られたのだ。

かくして、俺は暫定的に最強バンド（仮称）のギターボーカルを務めることになった。

この後ボドゲ大会で将来的に結成するバンドの命名権を争ったのだが、ぶつちぎり優勝したリョウが付けた『結束バンド』という名に虹夏が難色を示していたのはまた別の話だ。

## 各種ステータスとスキルの解説

『今朝は虹夏から電話があった。なんでも用があるそうで、彼女の家に来て欲しいとのことだ』

イベントが発生しました。このテキストは星歌さんに依頼したメンテナンスが終わった際に表示されるものですね。予測よりも一日遅れましたが、大勢に影響はありません。星歌さんありがとナス！

さて。楽器も入手できたことですし、ここで改めて今後の展望をお話ししておきましょう。

既に義務ランニングを終えて体力がCランクになっているので、これから保浦くんにはひたすらギターとボーカルの練習をしてもらいます。

一週間の内訳としてはギター練習を六回、ボーカル練習を十回。本の使用で伸ばしにくいボーカル適性に比重を置いてステを伸ばしていきましょう。

目標は育成パート終了までに技術力、V o . 適性、G t . 適性をA以上。余裕があれば知力も上げていきます。

ただし、もうしばらくは勉強を選んではいけません。育成パート序盤は知力を上げて恩恵が薄いですし、本チャートで絶対に通りたいイベントの発生条件が『イベント発生時期まで一度も勉強をしていないこと』だからです。

何とも奇妙な発生条件ではありますが、山田リヨウのイベントなので仕方ありません。

そんなわけで、保浦くんには休みなくひたすら練習に励んでもらいまししょう。次のイベントが起きるまで再び倍速します。

少しばかり長くなりそうなので、今更ですが各種ステータスやスキルの話でもしましょうか。

キャラメイクの際にお見せしたように主人公には八つの数値が設定されています。体力、知力、技術力、社交力の基礎ステータスと各種パートの適性ですね。

これらを大別するなら体力、知力が主人公の育成スケジュールに関

わるものであり、それ以外がライブやオーデイションといったパフォーマンスの成否に関わるものというようになります。

厳密に言うとなら社交力はどちらの性質も持っていますが、基本的にはこのような認識で問題ありません。

簡単に各数値の解説をしましょう。

体力は主人公の行動回数に影響し、知力は進路や補習の有無に関する数値です。

技術力は言い換えれば演奏の上手さといったところでしょうか。これと各パートの適性を乗算した数値がライブとオーデイションのスコアに直結します。

そして社交力についてですが、こちらは先に述べたようにRWYにおいて唯一スケジュールとパフォーマンス両方に影響する数値です。

いくつかのキャライベントには成功・失敗があり、その判定の際に参照されるのが社交力です。ライブの加点要素であるMCの出来にも関わるのでかなり重要な数値だと言えます。一部の例外を除いて上げ得なステータスなのでしっかりと覚えておきましょう。

基礎ステータスの解説はこんな感じですね。

パート適性の仕様についてお話ししていませんでしたのは、ボーカルと楽器を兼任する場合それぞれの補正値の平均を技術力に乗算してスコアを算出するというくらいですかね。

パート適性はそう複雑な数値ではないので『高い適性があればレベルの高いパフォーマンスができる』程度の認識で問題ないと思います。

最後にスキルの話と、ついでに隠しステータスの話もしておきましょう。

保浦くんが所持しているレアスキル『天性のカリスマ』には隠しステータスであるカリスマ値のランクをAに引き上げる効果があります。

カリスマ値は社交力と同様の働きをしてくれるもので、カリスマ系スキル獲得かライブ成功時のみ伸ばすことができます。

先ほどは社交力がイベントの成否とMCの出来に関与すると言い

ましたが、実際には社交力とカリスマ値を合算した数値がこれらを左右するわけです。なのでこのスキルを所持していれば社交力を上げる必要がなく、その分他のスケジュールに割く時間が増えます。

重要な数値であるにも関わらず、社交力を伸ばすことを保浦くんの育成計画に組み込んでいなかったのはこういうわけだったんですね。

もうひとつの所持スキルである『遅刻癖』はデバフスキルという枠組みのスキルで、特定のイベント中に主人公が遅刻してしまいます。

デバフスキルは主人公生成時に強力なスキルを所持していた場合ゲームバランスを崩さないように付与されるもので、成否判定のあるイベントで失敗した場合などにも確率で付与されます。

基本的には育成を妨害してしまうスキルですが、一部のスキルは特定のイベントで特殊な挙動を起こし、通常とは違う展開を見ることが出来ます。『遅刻癖』もそのひとつで、特に喜多郁代一年目攻略においては『天性のカリスマ』よりも優先度が高いです。

このスキルの真価は共通ルートをお楽しみに。

さて。これでこのゲームの基本的な仕様についてはおおよそ話し終えたでしょうか。

キリがいいのでそろそろ次のイベントに入って欲しいのですが……あ、ちやうど発生しましたね。

『家でひたすらにギターをかき鳴らしていると、いつのまにかリヨウが部屋の前に立っていた。そういえば、さつき帰ってきた時に施錠を忘れていたな』

## 怪物の繭

ギターを始めてから二カ月が経った。幸い三日坊主になることもなく、今の今まで練習漬けの日々を送っている。あの日以来俺は暇さえあればギターを弾き、指が切れれば歌を歌い、喉が潰れれば教本を読んだ。

常に身体のどこかしらに痛みがあったが、そんなのは成長を実感した時の快樂に比べれば些細なものだ。

父さんのギターが自分の手に馴染むたび、自分の声が曲を食らうたび、全身を駆ける征服感が俺をロックの沼に沈めていく。

ただただ、それがたまらなく気持ちよかった。

そんな毎日を繰り返しているためかギターと歌唱の実力は否応なく上達していった。別段比較対象がいるわけではないが、始めて二カ月の人間にしては相当上手い自負もある。

もつとも俺はこんな所で満足するつもりはないし、今より上達できないとも思わない。

そのモチベーションの根底にあるのは、もちろん虹夏とリョウ、星歌さんを驚かせたいという思いだ。

彼女らは俺よりもよっぽど耳が肥えているだろうし、想定の実力を軽く飛び越えるくらいでないかと驚かすことなんてできないだろう。

だから今日とて練習三昧だ。

左手は人差し指から小指まで絆創膏が巻かれているが、もうほとんど痛みは感じない。まだ時間も早いことだし今のうちにギターの練習をしよう。

物置き部屋で見つけたアンプにこれまた物置き部屋で見つけたシールドを繋ぐ。印字の擦れたツマミを回して音量だの音の質だのを調整しながら、お気に入りのフレーズを弾いて指を温めた。

「……………」

基本的な準備を終えた後、俺はいつも一分程度の瞑目を挟む。ルーティンの意味もあるが、一番の目的は例の不快感を頭の中に呼び起こすことだ。



毒薬変じて薬となる——といったか。俺の日常を妨げる電子音は練習中に限っては頼もしい相棒だった。

なにせ頭の中にメトロノームがあるようなものだ。秀でた音楽の才能に恵まれなかった俺にとって、この音に裏付けられたリズム感は強力な武器になる。

不快なことには変わりはないが、それでも圧倒的な実力を身につけるために利用しない手はなかった。

ジジ、と音が鳴る。

「——来た」

脳幹を貫くような感覚。

正体不明の信号に身体を委ね、意識をより内側に沈めていく。耳鳴りみたいな音はこんなに喧しいのに、不思議と頭は冴えていった。二重、三重に思考することだってできる。

確信こそないが、いわゆるゾーンと呼ばれる状態なのだろう。呼吸、拍動、それからノイズ。自分から出る音だけが世界のすべてだった。

目を開いて擦り減ったピックを手に取る。意識を音と両手に集中させて、若者の間で流行っているらしいバンドの曲を弾き始めた。



「あれ。カンナ、ギター弾いてるんだ」

本屋で雑誌を買ってきた帰り。カンナの家の前を通ると、ギターの音が漏れ聞こえてきた。

学校が終わったと思ったらすぐに帰ってしまったのはこのためだったのか。

納得しながら、カンナが声もかけずに行ってしまったことを愚痴る虹夏のことを思い起こした。適当なことを言っておいた分の貸しはいつか絶対に返してもらおうと心に誓う。

「どれくらい上手くなったんだろう……Fコードの壁を越えてたら出来、ってところかな」

せつかくだから少し聴いていこうと思つて路傍に立ち止まつて耳を立てる。多分、弾いているのは先月リリースされた人気バンドの曲だ。

始めて二ヶ月くらいのカンナが弾くには難易度が高いはずだけど、少なくともイントロのリフにはたどたどしさを感じなかった。

「……上手い」

イントロだけじゃない。AメロもBメロも、サビまでいっても安定感是不変わらない。

壁越しだと細かいニュアンスまで分からないけど、正確無比なリズムで刻まれる音は耳に心地よかつた。

私はカンナの演奏を直に聴いてみたいと思つて、玄関に足を運んだ。

インターホンを鳴らす——が、数分待つても人が現れる気配はないし、ギターの音も鳴り止まない。どうしたものかと考えて試しに手をかけてみると、ドアは難なく開いてしまった。

在宅中とはいえ鍵をかけていないのは不用心じゃないか。流石の私も心配になる。

「カンナ、入るよ」

聞こえてはいないだろうけど、一応家主のカンナに声をかける。予想通り返事はなかつた。

許可なしに家に上がるのは憚られたから、鍵がかかっていなかったのでを伝えなきゃいけないし、と大義名分を胸に靴を脱ぐ。

音が聞こえてくるのは二階だ。見慣れた階段を上がり、すぐ左のドアを開ける。私と音との間に隔たる壁がなくなつて、音圧が一段階強くなつた。

「カン、ナ」

声が詰まる。

そこにいたカンナは、私たちがつい数時間前まで一緒にいた彼とは別人みたいな雰囲気があつたから。

思わず呼吸を忘れる。

他人より少しだけ長い髪を揺らすその姿は、今まで目にしたどんな

モノよりも衝撃的だったから。

「……すごい」

気付けば声が漏れていた。

初めて数ヶ月の人間がこんなにもサマになった姿でギターを弾くのを、私は見たことがない。後ろ姿を見た瞬間に袖の下の皮膚が粟立ち、自然と笑いが溢れるようなギターリストを、私は見たことがない。ただ見ているだけで吞まれそうになるのを、私は腕を抱いて耐えた。

演奏にしたってマトモじゃない。もちろん良い意味で、カンナの演奏は逸脱していた。

音の粒が揃いきっていなかったりミュートが不十分な所があったりと荒削りな部分はあるが、それでも既に数年間ギターに触れたアマチュアと遜色ないほどの実力だ。

何より驚かされたのは、ハイテンポで複雑なフレーズを音源を思わせるほどに正確なリズムで弾いてみせたこと。見たところメトロノームを置いているわけでもないし、彼はそれを自身に備わったリズム感のみでやってのけているようだった。

それに気付いた瞬間私の本能が察した。

カンナは本物だ。もう一年……いや、二年もすれば彼の腕はプロの領域に達するだろう。

……だけど。

そんな啓示とともに生じたのは、果たしてその時カンナの隣でベースを弾いているのは私なのだろうかという不安だった。

私にも実力はある。それに伴う自負もある。それでもこの圧倒的な成長スピードを前にした時、私が積み上げてきたものが揺らいだ気がしたんだ。

「――ハハ」

乾いた喉から笑い声がした。

幼い頃から私と虹夏、そしてカンナの三人はずっと一緒だった。まさかその中にこんなバケモノじみた逸材がいるなんて考えたこともなかった。

ついこの間までカンナはまるでロックに興味がなかったし、だからこそ私と虹夏も楽器を始めることを無理に勧めたりはしなかった。

だけどうだ。今日の前でギターを弾いている幼馴染みは正真正銘の麒麟児じゃないか。こんな面白いことが他にあるだろうか。

らしくもなく闘志が燃える。身体の芯が熱くなるのはきつと錯覚じゃない。

胸中には、ただこのバケモノと肩を並べてバンドをやりたいという思いだけがあった。

だからカンナにも、もちろん他のベーシストにも負けてはいられない。

誓いながら、私は膝を抱えて床に座った。

何をするでもなくずっとカンナが演奏する姿を見ていた。彼の隣で自分がベースを弾く姿を夢想しながら、ずっとそこに座っていた。

しばらくして一息入れようと立ち上がったカンナが、私の姿を見てひどく驚いていたのは言うまでもないだろう。

## 定期テストと補習システム

保浦くんによってリョウの脳が破壊されてしまいました。まあカリスマ持ちだからね、仕方ないね。

こちらはリョウが幼馴染みの場合育成パート中に発生するイベントの一段階目です。彼女のイベントは他と比べて少し特殊で、ここ←までに主人公が勉強をしているか否かで分岐が起こります。

それぞれの特徴を簡単に説明しましょう。

まず前者は勉強会ルート。これは成績が危ういリョウのために定期的に勉強会を開くルートで、彼女が壊れる姿を高頻度で拝むことができます。

そして後者がバンド加入ルート。リョウが結束バンド発足前に参加していたバンドに加入するルートで、唯一育成パート中にライブの経験が積めます。

こう説明すると勉強会ルートを通る意味はないように思えますが、バンド加入ルートに入ったとしてもライブによるステータス上昇は微々たるものですし、完走して取得できるスキルもそこまで強いわけではないので基本的にはどちらを通っても問題ありません。

例外的に喜多ちゃんを攻略する場合はバンド加入ルート一択です。

同ルートのみ発生するイベントは共通ルート中喜多ちゃんの好感度管理を容易にしてくれるので、幼馴染みにリョウを引いたら確実にこちらに入りましょう。一年目攻略でなくともうまあじです。

さて。コマンド選択が自由になったことですし、保浦くんの育成を次の段階に進めましょう。

ここから半月先の期末テストまではこれまでのスケジュールをベースに一日に一度勉強をします。

本当はもつと進んでから勉強を始めようと考えていたんですが、保浦くんが中間テストで酷い成績を取ってきてしまったので少しだけ繰り上げです。

知力が初期値なのである程度は覚悟していましたが、まさか国語・英語以外の三科目で平均点を下回ってしまうとは思いませんでした

ね……。

ともかく、ここで勉強を選ぶ理由に納得していただくためにもまずは補習システムの解説をしましょう。

RWYでは中間・期末テストの両方で平均点を下回ってしまった科目の数に応じて、長期休み中に補習を受けなければなりません。

一科目につき五日間拘束されるので、二科目以上補習を受けるとかなりのロスになります。

そして補習の最も凶悪な点は、補習日は勉強以外を選択できなくなる所です。

一見知力を伸ばす良い機会に見えますが、RWYにはステータスの総合値が増える度に練習による伸び率が減っていく仕様があります。

つまり補習によって知力を伸ばしすぎてしまうと、それ以外の数値が伸びにくくなってしまいうんですね。

保浦くんは平日に二回行動ができる上に趣味の読書によって知力の伸びに補正がかかっているので、二科目以上の補習は何としても避けたい所です。

無駄に知力が盛られるのを避けるために、ここで先んじて知力を上げておくという意図は理解いただけたかと思います。

半月もあればDに到達するのは確実ですし、C到達が視野に入れば少しスケジュールを調整して伸ばし切ってしまいましょう。

それでは育成再開です。

テストがよつぽど悪い点数でもない限り、次のイベントまで倍速で流してしまおうと思います。



『今日は期末テストだ。それなりに勉強してきたし、きつと夏休みの補習は避けられるだろう』

……どうして等速に戻す必要があるんですかね。

私にはさっぱり分かりませんが、せっかくなので定期テストのシステムを解説します。

定期テストでは、まず主人公の知力に応じて総合点が抽選されます。それが五科目にランダムに配分されて最終的な結果が決まるという寸法です。

先ほど表示されたテキストだと「何も起こらなければ」八割程度の総合点が期待でき、補習はほぼ確実に回避できるものと思われません。

要するに、我々の勝ちということですよ。風呂に入りながら田んぼの様子でも見に行きましょう。

『——しかし二度寝で遅刻してしまって、三科目のテストを受けることができなかった』

ファツ!? どうしてテスト当日に昼過ぎまで寝ているんですかねえ！ 頭に来ますよ！

……まあ、言わずもがな『遅刻癖』のせいですね。

最悪のタイミングで発動したのですが、幸い二科目は受けられたみたいです。

受けられなかった三科目が数学、社会、理科でない限りはまだ希望が持てますね。

過ぎたことは仕方がないので、明日の答案返却までひたすらに祈りましょう。

『国語87点 数学0点 社会0点 理科0点 英語85点だった。』

数学、社会、理科の補習が決定してしまった』

デデドン！（絶望）

## 世話焼きな姉妹（1／2）

「国語87点。英語85点。他が0点……何だこの点数」

「寝坊したせいで三科目受けられなかったんだって。まったく、せっかく国語と英語で良い点数とったのにもったいないよ」

「ぐうの音も出ねえ……」

期末テストが終わり、全科目の答案が返却された日の夜。久々に伊地知家で夕食を世話になっていた俺は二人の視線から目を逸らした。

大抵のことは笑って誤魔化せるが、いくらなんでも寝坊して三科目補習決定は間抜けすぎて死ぬ。穴があつたら入りたいし、そのまま埋まってしまいたい。

テスト中の教室に入った時の視線なんてトラウマものだった。あの奇異な物でも見るような目は今でも鮮明に思い出せるくらいには応えたし、きつと一生忘れることはないだろう。

回想で自爆して、思わず頭を抱える。

「……最悪だ。クソ恥ずかしいし夏休みも消えた」

「自業自得でしょ。これに懲りたら普段から規則正しい生活を心がけること。分かった？」

「イエス、ママ！」

「何がママだよもう……」

苦笑して麦茶を飲む虹夏。対する俺も、熟れたりアクションを残念に思いながらコップに手を伸ばす。

その時、静観していた星歌さんが爆弾を落とした。

「カンナが朝弱いならお前が毎朝起こしに行つてやればいいじゃん。どうせ学校行く時に家通るだろ」

「ぶっ——！」

瞬間、虹夏は盛大に麦茶を吹き出した。彼女の正面に座っていた俺は、当然その飛沫をモロに受ける。

「うわ、汚ね」

「お姉ちゃんが変なこと言うからでしょ！……って、ごめんカンナくん！すぐタオル持ってくるから！」



「急がなくていいよ。こういう時はアレだ。『我々の業界ではご褒美』とか言うといいってリョウが」

「ああもう！ 変なこと吹き込むな山田ア！」

叫びながら洗面所へ走る虹夏。それ見る星歌さんは愉快そうな表情だった。アルコールが入っているからか、かなり気分が良いように見える。

「……星歌さん結構酔ってるでしょ。後で虹夏にしっぺ返し食らっても知りませんよ」

「大丈夫大丈夫。その時はその時だよ」

ビールが入ったアルミ缶を揺らして笑う。こう言っては失礼かもしれないが、そんな擦れた大人のような仕草は星歌さんの雰囲気によく似合っていた。

「あ、そうだ。勉強だの遅刻だのはどうでもいいとしてさ。最近ギターの方はどうなんだよ」

「ぼちぼち、つてところですかね。まだ始めたばかりなので、今はとにかく上達するのが楽しいです」

「そっか。そりや良かった」

「俺、星歌さんを驚かせるくらい上手くなりますから。期待して待っててください」

「お、言うじゃん。楽しみにしとく」

星歌さんに啖呵を切って笑うと、洗面所から戻ってきた虹夏が俺の頭にフェイスタオルを被せてわしゃわしゃと拭き始めた。

嗅ぎ慣れた柔軟剤の匂いが鼻腔を蕩かす。

虹夏の近くにいたり、すれ違ったりするとこういう安心感のある匂いがする。

心地よくてされるがままに任せていると、突然鼻をつままれる。タオルをどけると、眼前には少しむっとしたような虹夏の顔があった。

「そんなこと言って私には聴かせてくれないじゃん」

「まだ人前で弾けるほど上手くないんだよ」

「ふくん。じゃありョウがカンナのギター聴いたって言ったのは？」

『カンナは絶対とんでもないプレイヤーになる』とか絶賛してたけど。

なんでリヨウの前では弾いてるの?」

指摘されて目を逸らした。

アイツには口止めをしておいたはずだが無駄だったらしい。……今度から施錠には気をつけよう。

「それは別に俺が呼んだわけじゃないというか、気付いたらアイツが部屋いたというか……」

「……? どういうこと?」

「玄関の鍵かけ忘れたままギター弾いてたんだけど、たまたま通ったリヨウがそれに気付いて勝手に部屋に上がってたんだよ」

「いやそれ普通に犯罪じゃん」

言いながらため息をつく。

それが俺の防犯意識の低さに向けられたものか、リヨウの奔放すぎる性質に向けられたものかは知れないが、ともかく呆れていたのだけは確かだった。

「……まあ、私だけ仲間はずれにしてるんじゃないならそれでいいや。お姉ちゃんに演奏聴かせる時は、ちゃんと私も誘ってね?」

「もちろん。約束する」

真っ直ぐに目を見て言うのと納得してくれたようで、笑顔になって踵を返す。

その途中、虹夏はまた振り返って言った。

「——あ。あとカンナくんは毎朝私が起こしに行くことにしたから!

後で合鍵貰うね!」

「なんで……?」

## 世話焼きな姉妹（2／2）

「カンナ、まだ時間大丈夫か？」

「……？ ええ、まあ」

「ん。じゃあちよつと付き合えよ」

食器の後片付けをする虹夏を手伝った後、ちょうど家に帰ろうという時に星歌さんに呼び止められる。

珍しいこともあるもんだ、なんて思いながらも、特にすることもなかったから了承した。

俺は虹夏と一言二言交わしてから伊地知家を後にして、星歌さんに着いていった。程なくして到着したのは自販機とベンチだけが置かれた休憩スペース。

「なんか飲む？ 奢るけど」

「じゃあコーヒーをお願いします。ブラックで」

「はっ、ませてんなあ」

「別にいいじゃないですか」

食後にコーヒー飲むとスッキリして良いでしょ——とか言いかけて、やっぱりやめた。ここで変に言葉を重ねるのも子供っぽい。

「どうも。ありがとうございます」

真つ黒なスチール缶を受け取って礼を言う。ベンチに座ってプルタブを起こすと、リンゴジュースを手にした星歌さんが隣に腰を下ろした。

「……好きっすね。そのジュース」

「うっせ。別にいいだろ」

意趣返しとばかりに揶揄うと、彼女もまた俺と同じような反応を返す。それがなんだかおかしくて、互いに顔を合わせながらくつつつと笑った。

ひとしきりそうした後、星歌さんは息をつく。俺はその仕草に紫煙を幻視した。

「夏でも夜は案外冷えるな」

「ええ。そうですね」

周辺には俺と星歌さん以外の気配はなく、自販機の稼働音だけが夜空に響いている。

わざわざこんなところに連れてきたということ、何か俺に話でもあるんだろうか。そう考えてちびちびとコーヒーを飲んでいたのだが、しかし話が振られるような気配は一向になく。

缶の中身が半分くらいになったあたりで痺れを切らした俺は、自分から彼女に意図を尋ねることにした。

「俺に何か用でもあるんですか？」

「なんでそうなるんだよ」

「貴女、駄弁るためだけにこんな所に連れて来るような質じゃないでしょ。そう考えるのが自然です」

「……敵わねえな、まったく」

頭を掻きながら脚を組む。両手を組んで身体を伸ばすと、背もたれに体重を預けた。

「虹夏のこと、ちょっとな」

そう言つて、星歌さんは続く言葉を紡ぐように唸りながら顎に手を当てた。やたらと神妙な面持ち。心なしかその声も重い。

俺は姉妹の間に何かあったのかと勘繰ったが、今日の二人の様子を見る限りおかしな点はなかった。

内容に見当が付かない。だから俺はただコーヒーを一口含んで彼女の言葉が続くのを待つ。

数秒の間そうしていると彼女は口を開いた。

「なんつーかさ、アイツ最近面倒くさくね？」

「長考した割に言葉の切れ味が鋭い」

こういう時は普通オブラートな表現を探すものではなからうか。言葉に飾り気がないのは星歌さんらしいが、今回ばかりは流石に苦笑を禁じ得なかった。

「……ま、言いたいことは分からんでもないですが」

そう呟くと、彼女はこちらを一瞥した。言外に「詳しく話せ」とでも言いたげな表情だ。

それを受けて俺は虹夏の姿を思い起こし、返す言葉を検討する。虹

夏が俺やりヨウに構いたがるのは昔からだ、やはりここ最近はそのような言動が顕著——というか異常なほどに見られる。

そこにはきつと誤解も誤謬もない。夜風に吹かれる髪を片手で押さえながら自分の考えを口にした。

「なんというか、虹夏は最近やたらと俺に絡みに来る節があるように感じるんです。俺としては別に鬱陶しいとは思わないんですが、星歌さんが面倒だと言ったのは多分こういう所かなと思って」

「……はは。なるほど、やっぱそうか」

色々な感情が絢交ぜになったような、そんな笑い方だった。

「私がバンドやってた時と同じだな」

「同じ、というと？」

聞くと星歌さんは一瞬だけ逡巡するような素振りを見せる。かと思えば一息にベンチから立ち上がって、ギリギリ俺に届くかどうかの音量で「まあ、お前ならいいか」と呟くと空を見上げた。

「私さ、三年前に母親が死ぬ時まで家族のことなんて煩わしいと思ってたんだ。あの時はバンドやったり、友達と馬鹿やったりするのが私の全部だったから」

どこか遠い目をしながらの独白。さながら古いアルバムでも眺めるような横顔に閉口する。

「だから遊びたい盛りの虹夏にもロクに構ってやれなくてさ。おかげで練習中にアンプの音量いじられたり、普通に過ごしてる時もちよっかいかけられたりしたんだよ。今となっちゃいい思い出だけだな」

どこかで聞いたような話だった。言われてみれば、三年前くらいに虹夏がよくそんな話をしていた覚えがある。やれ『お姉ちゃんも遊んでくれない』とか『ギターもバンド嫌い』とか。

話というよりも愚痴のような感じではあったが。

脳裏にかつての映像を思い起こしているといった意識が内面に向く。それを察したのか、星歌さんは二、三度咳払いをした。

「同じってのはつまり、虹夏はお前をギターに奪られたと思って妬いてるってことだ。本人が自覚してるかは知らないけど、姉の私からはそう見える」

「……妬いてる、ですか」

眩きながら彼女の言葉を咀嚼する。一番容易な解釈、もとい主張の要点は「もつと虹夏に構ってやれ」といったところだろう。

そう思い至った所でそれが夕飯の時の出来事が繋がり、思わずため息をついた。相変わらずやり方が雑というか、不器用というか。

俺は眉間を指で押さえたくなるのを堪えながら、小さく息をついた。

「急に『毎朝起こしに行ってやれ』なんて言ったのはそういうことでしたか。……確かに虹夏のガス抜きのためにはそれがいいのかもしれないけど、普通妹が一人で男の家に行くように嫉けたりします？

俺がアイツに手を出さない保証なんてないでしょ」

「別に合意の上なら手え出したっていいよ。お前にそんな勇気があるとは思えないけどな」

「今絶対にひとこと余計でしたよね?！」

抗議する俺に対して星歌さんは余裕のある笑みを返す。その顔に十二年分の経験の差を感じて、思わず押し黙った。

「ま、私としちやお前らの仲が良好なら関係なんてなんだっていいんだよ。だからこれからも虹夏によくしてやってくれ。……私の夢のためにもな」

「星歌さんの夢? なんです、それ」

聞き返すと、彼女は俺のリアクションに心底意外そうな顔をして。

「あれ。話したことなかったっけ? 下北沢でライブハウス作ろうとしてる話とか」

「全くもって初耳ですよ」

金髪をかき上げながら、さらっとそんなことを言っただけ。

虹夏から星歌さんがバンドをやめたと聞いた時には心底驚いたものだが、今はライブの運営側としてロックに携わろうとしているということだろうか。

「素敵な夢じゃないですか。自分のライブハウスを持つのは微力ですが俺も応援しますよ」

「いや、ライブハウス作るのまでは既定路線だから。私の夢はもつと

先だよ」

星歌さんはまっすぐに俺に向き直ると、ベンチに座る俺の額に人差し指を突き立てた。

その指先はまるで職人のように硬く、彼女がギターに注いだ愛情の深さを物語っている。自分の五指が情けなく感じるほどだった。

正直に言つて、何故それほどの人間が自分のバンドを抜けてまでライブハウスを持つと思うたのかは疑問だった。

聞くところによると彼女のバンドはレベルからも声がかかっていたらしいし、素人目で見てもインディーズの中では頭ひとつ抜けた実力を持っていた。

しかしその疑問は彼女の夢を聞くことで解消されることとなる。差し詰め彼女は筋金入りのシスコンで、どこまでも不器用な優しさを持った女性なのだとなつたからだ。

「私の夢は、自分のライブハウスで虹夏とお前らの最高のライブを見ることだ。……こうして聞いちゃったからには、カンナにも付き合ってもらおうからな？」

夜空の下、ふっと笑う星歌さんの顔が網膜に焼き付く。尊敬する彼女に夢を託された俺は、胸の中に熱を感じていた。

「——はい。貴女の夢は、俺が叶えます」

真っ直ぐに誓う。俺と星歌さんの約束を、月明かりだけが照らしていた。

## バンド加入ルート分岐

こちらが本タイトルで屈指の人気を誇る伊地知家イベントです。

練習に入れ込む主人公に対して湿度が高くなる虹夏や夢を託す星歌さんが魅力的なのですが……正直私はこの後の補習のことしか考えていませんでした。

十五日間の補習と二回行動、そして趣味による補正を考慮するとおそらく保浦くんの知力は夏休み終了までにB、下手したらB+まで伸びることが予想されますからね。

進学校である下北沢高校の合格ラインが知力B+であることを鑑みれば、一年生の夏でこれだけ知力が伸びていることがどれほど異常なことかご理解いただけるかと思います。

要するに『ンアッー！ 知力がデカすぎる！』ということですよ。

……まあ、三年生時に中間・期末両方で遅刻を引いて知力がカンストしても尚勉強コマンドを叩き続けるよりはマシだと考えましょうか。

### (二敗)

何より保浦くんの遅刻は元々チャートを組む際に考慮していた要素ですし、多少のガバがあってもリカバリが効くようになっていきます。

おそらく本で上げにくいV.O. 適正はB+止まりになってしまうでしょうが、それでも依然としてチャート通りのムーブで攻略するとは可能ですから続行の判断をしました。

ただV.O. 適正はあつて困る数値ではないので、育成パートと共通ルートの間にある空白期間で勝手に伸ばしてくれることを期待するばかりですね。

あ。そういえば空白期間について言及したのは今回が初めてでしたか。

既に何度かプレイしたことがあるアニキたちはご存知でしょうが、RWYでは虹夏もしくはリヨウが幼馴染みの場合、育成パートと共通ルートの間に一年間の空白ができます。

これは虹夏・リヨウの二年生組、ひとり・郁代の一年生組のどちら



が同級生になっても同程度のステータスで共通ルートに入るようにするための要素です。

育成パートを中学一年から結束バンド発足前までにすると、二年生組が同級生だった場合は育成パートが四年間になってしまいますからね。

ただこの空白期間中、主人公は何もしてくれないワケではなく自分のパートの適正を伸ばしてくれます。

V.O. 適正を上げる練習を三度以上している場合はV.O. 適正と楽器適正のどちらかをランダムに鍛える仕様になっているので、保浦くんの場合はV.O. とG.t. の二択。

もし五分で前者を引くことができれば限りなく理想ステータスに近付くことができる——と思われれます。

厳密に計算したわけではないので確証はありませんが、とにかく進めていきましょうか。

画面は補習初日の朝。宣言通り虹夏が保浦くんを起こしにきてくれるシーンですね。

彼女が主人公を揺すり起こすこちらのスチルは主観視点になっていて多くのアニキたちを狂わせたことで有名です。

虹夏が幼馴染みの場合は何度も見ることになるので、推している方は是非このルートをプレイしてみてください。

順当に虹夏ルートに入るもよし、別のキャラルートに入って曇る虹夏の顔を思い浮かべるもよし。無限通りの楽しみがありますね。今回は喜多ちゃんが攻略対象なので後者です。

虹夏が作ってくれた朝食を摂って学校へLet's Go. 学校に行ったら学校に行ったら主人公と共に補習となったリヨウがいます。

実はこのゲーム、リヨウが幼馴染みの場合に主人公が補習クラスに落ちると彼女も必ず一緒に補習を受ける仕様がありました。

ステータスにこそ不安は残りますが、結果として虹夏とリヨウ両方のイベントを回収できているので実況の展開的には美味しいです。

家には虹夏。学校にはリヨウ。

まさに両手に花というのが相応しい展開ですが、未だ一度も登場していない喜多ちゃんこそが保浦くんの人生のメインヒロイン……たまげたなあ。

これからどんな風に保浦くと喜多ちゃんがくつつくのか、今後の展開が楽しみでなりません。

——さて。虹夏とリヨウの曇らせ妄想もほどほどにして、ゲーム画面の解説に戻りましょう。

現在進行中のイベントはリヨウによる主人公の勧誘イベントです。ここが先ほどお話ししたバンド加入ルートへの分岐点ですね。

これは本来なら夏休み中盤——具体的には八月上旬に発生するものなのですが、この期間に補習が被っている場合はタイミングが七月初週に前倒しになり、その上バンド加入に際してオーディションイベントが追加で発生します。

ただオーディションといっても簡単なもので、今の保浦くんのスータスであれば鼻クソをほじりながらだろうがパンイチで受けようが合格します。

仮にここまで育成が下振れ気味だったとしても知力ぶっぱなんて変態的な型でもない限り加入できるので、リヨウが幼馴染みかつ二科目以上の補習が決まってしまった場合はとりあえず受けておきましょう。

今画面に表示されている『オーディションを受ける』を選びます。するとこのように今週の日曜日に予定ができますので、きちんと覚えておきましょう。

RWYは予定がある日にもコマンド選択が可能で、当日に別の選択肢を選ぶと警告表示もなく予定をすっばかしてしまいます。

本当に、本当に注意しましょう（十三敗）  
それではオーディションまで倍速。

## 残酷なまでの天才性

「ぎ・はむきたす？」

「うん。それが私たちのバンド名」

夏休み一週目の日曜日。俺は愛機が入ったハードケースを片手にリヨウと下北沢の街を歩いていた。

とつくに慣れたはずの道を行く足は緊張のせいか少し強張っている。なんでも今日は彼女のバンドに加入するためのオーディションをするとかで、行きつけのスタジオに向かっている最中だ。

正直なところ、俺はリヨウにバンドの勧誘を受けた時に「たまにセッションする集まり」程度に捉えていたのだが、その実『ぎ・はむきたす』の活動形態はオリジナル曲を作成するほど本格的なものだった。

だから突然スコアを渡されて「週末までに覚えてきて」とか言われた時には心底驚いたし、リヨウの情報共有の杜撰さを改めて思い知らされた。

やはり彼女の提案に二つ返事で頷くものではない。そのせいでここ一週間は授業の復習とギターの練習で忙殺される羽目になったのだ。

虹夏が家事を手伝ってくれていなければ俺の生活は間違いなく破綻していただろう。

そんなことを思いながら何度か深呼吸を繰り返していると、不意に空いた手を握られた。

「――不安？」

「え」

思わず声が漏れた。眼前にはいつも通り何を考えているのかわからないリヨウの顔がある。

察するに彼女なりに気を遣ってくれているのだろう。ありがたいことだが、ナチュラルに手を握るのは心臓に悪いから控えてほしい。

胸中にそれまでと別種の緊張感が生まれるのを感じながら、俺はそちらに視線を向けた。

「まあ、不安じゃないと言えば嘘になる。ちゃんと人前でギターを弾くのは今日が初めてなワケだし」

「……? この間私の前で弾いたでしょ」

「ノーカンだろあれは」

首を傾げるリョウに苦笑する。

この前のは事故みたいなものだし、そもそも付き合いの長いリョウの前と初対面の人間の前で演奏するのでは心的負荷が段違いだ。

そう伝えると、彼女は「それでも」と微笑んだ。

「大丈夫。カンナはここにいる誰よりも上手い。合格は間違いないし、何なら自分中心のバンドに作り替えるくらいの心づもりで演奏すればいい」

「生憎と俺にそんな野心はない。……けど、リョウがそこまで言うなら合格くらいは勝ち取ってやるよ」

「うん。その意気。最強のバンドを作るなら、これくらいは簡単に乗り越えてもらわないと」

「……………」

発破をかけられて思い出す。

入学式の帰り道。茜色の空。そこに叫んだ夢の像。

その過程を今日歩み始めようというのだ。まさか一步目から踏み外すわけにはいかないだろう。

目指すのは「最強」だ。

誰もが憧れて、誰もが夢を見て、誰もが信仰するような。そんなフロントマンになるんだろうが。

たかが同世代を寄せ集めたバンドで一番になれない奴がそんな風になれるわけがない。

俺はリョウに向き直って不敵に笑う。既に身体に緊張はなく、代わりにノイズの予兆があった。

「——やっぱ目標変更。今日のオーディションで俺がバンドのエースを乗っ取る」

宣言と同時、エレベーターのドアが開いた。



「じゃあカンナ、準備できたら好きに始めて」

「はいよ。それじゃ早速」

山田の紹介でオーディションを受けに来た少年、保浦寛和は髪をハーフアップにまとめながら言った。

中性的なビジュアルに静謐な表情。端正な顔立ちの中でもとりわけ目立つ翡翠色の瞳は悲壮美を湛えていて、どこまでも惹き込まれるような魅力がある。

総合して彼はとびきりの美男子と言えるだろう。もし彼がフロントマンをすれば、これまでより容易に女性ファンを獲得できると思われる。

しかし私はそれ故に不安感を抱いていた。

私たちのバンドはスリーピースのガールズバンド。そこにもし保浦くんが新メンバーとして加わることになれば、色恋沙汰に発展するのは時間の問題だ。

本気で音楽をやる上でそういった不和は避けたい。

だから余程上手いプレイヤーでもない限り彼の加入には反対しようと考えていたのだが——聞いたところ、彼のギター歴は三カ月弱らしい。

結果は見えていた。山田が出した条件は満場一致の場合のみ加入だ。

懸念を持つ私はもちろんのこと、ポジションが被る現ギターボーカルの七瀬も簡単には賛同しないだろうから、彼がこのオーディションを突破するのは困難を極めるだろう。

そんなことを思いながら山田を一瞥する。

私の予測とは裏腹に、彼女は余裕に満ちた表情で脚を組んでいた。「改めて、保浦寛和です。どうぞお手柔らかに」

保浦くんがそう口にした数秒後。このバンドで初めて作ったオリジナル曲のイントロが始まってすぐに、私はその異質さに目を見開いた。

「……なに、これ」

気付けばそう呟いていた。

何度も聴いたメロディだったはずだ。

何度も聴いたフレーズだったはずだ。

私たちが生み出し、私たちが誰よりも理解しているはずの楽曲。しかし目の前で彼が奏でているモノは、全く別物であるように感じられた。

それは決して保浦くんのプレイが下手なわけではない。むしろ逆だ。たった三カ月弱でこの域に至っていることに恐れすら抱くほど、彼の演奏は優れている。

ソロの演奏で映えるようなアレンジ。薄くなったサウンドを補うように複雑化された音色。

例えるなら、あのギターはかつて私たちが創りたかった世界観の解答だ。普通バンド単位で描き出す正解の輪郭を、彼はたった一人で淡々と叩き込んでくる。

——残酷なまでの天才性。

何がお手柔らかにだ。これはまるで私たちが積み上げてきたものを完膚なきまでに叩き潰すようなパフォーマンスじゃないか。

実際にドラムを担当する私は機械じみたリズムキープに畏怖を覚えていたし、ギタボの七瀬は圧倒的な技術と歌唱力に現を抜かしたような顔をしていた。

「……こんな人、どこで知り合ったの」

私の声は震えていた。

対して山田はこんな化け物じみたプレイを前にして、さも当然といった顔で笑いかけてくる。

「覚えてない。幼馴染みだから」

それだけ言つて、彼女は保浦くんの方に視線を戻してしまった。もう少しでちょうどアウトロに入る。その横顔には彼の描き出すメロディを楽しみたいという思いがありありと表れていた。

この場で唯一山田だけがあの怪物を理解している。その事実には私は息を呑む。

何故山田はアレを前にしてまともで居られるのか。

曲が終わりに向かう最中、私はずっとそのことだけを考えていた。

「じゃあ、二曲目——」

いつの間にか安心してしまった私が次に意識を取り戻したのは、彼がそう口にした時だった。

「待って」

「言いながら立ち上がる。

脚が震えるせいでパイプ椅子が倒れるのも意に介さずに、私は保浦くんの前に立った。

「……私『ぎ・はむきたす』のドラムやってる木崎。合格だよ保浦くん」

右手を差し出すと、彼はそれ握り返してさほど興味なさげに「どうも」とだけ返した。

## 今後の方針

ということとで初のオーディション終了です。現状保浦くんの演奏関連ステータスはC＋後半といったところですが、難易度が低くカリスマによるスコア爆上げもあつたので評価は余裕のSランク。

現ギターボーカル七瀬のお株を奪う形で「ぎ・はむきたす」への加入が決定しました。

ちなみに本イベント、主人公のメインパートがG t. の場合は「七瀬がG t. or V o. に専念するため」という理由で勧誘されるのですが、D r. の場合は離脱済みの木崎の穴を埋める形になるので一味違う展開が見られます。

リヨウと被るB a. の場合も同様で、確か彼女のヘルプとしてライブに参加することになるはずです。

閑話休題。「ぎ・はむきたす」に入り、定期的な知力上げの必要もなくなったので、残りの育成はG t. ・V o. 適正と技術力を鍛え続けるだけの簡単なお仕事。

二年半くらいは同じ絵面が続くので、今後はこれまでに倍以上を多用していくことになると思います。

というのも、正直に言って皆さんにお話しすることがもうほとんどないんですよ。

本来は勉強を踏むタイミングや理由なんかをその都度説明しようと思っていたんですが、下北沢高校合格に必要な知力は補習だけで稼げてしまえそうですし。

それならいっそ、さっさと共通ルートまで進めてしまおうという魂胆です。

視聴者の方々にとっても変わり映えしない映像を見続けるより本編ベースのシナリオに入った方が良いでしょうからね。

というわけで、テンポよく共通ルートに進むために先んじて回収したいイベントについて解説します。

ここで扱うのは特にプレイヤーの選択によって回避可能な任意イベントについてです。



まずは路上ライブイベント。

これは喜多郁代一年目攻略狙いかつリヨウが幼馴染みであれば是非回収したいイベントです。

ご存知の通り、喜多ちゃんがリヨウに対して好意を持つようになったきっかけは過去にリヨウの路上ライブを見たことにあります。

RWYではそこに居合わせることで育成パート中から喜多ちゃん的好感度を上げることができるといっては有名な話ですが、実はリヨウに対する好感度の暴騰を牽制できるという点でも利があまりあります。

必須ではないにしろ攻略を容易にしてくれるので、可能なら通っておきましょう。

次に「ぎ・はむきたす」のライブイベント。

これを回収することによってリヨウを含むバンドメンバーの好感度上昇、それと同時にとあるキャラからのスカウトを狙います。

このスカウトはライブ後に確率で発生する特殊イベントなのですが、当選確率はカリスマ値依存なので保浦くんなら約八割で引き当てることができます。

ライブは三か月ごとに行われますし、その度に抽選が回るので全部外すなんてことはまずあり得ません。

……方が一そうなったら再走ですね。

また、余談ですが『天性のカリスマ』持ちの主人公を厳選していたのは確実にこのイベントを通ること、リヨウが幼馴染みでなくても彼女のバンドに入ることを目的としていました。

おそらく育成難度緩和のためと考えていた方が多いと思いますが、そちらはあくまでついでです。

後者の方法についてはまたの機会にお話しするとして、ひとまずスカウトイベントについての説明を。

端的に言えば、これは共通ルートにおける「裏ルート」に入るためのフラグイベントです。

詳しくはそこに分岐した際に深掘りしますが、現ver.で喜多郁代一年目攻略を成功させるためには同ルートを通るのが最も確実だ

と考えています。

分岐の方法はとでも分か<sup>り</sup>やすく、スカウトを保留にして“ぎ・はむきたす”が解散した後『<sup>??????</sup>に電話をする』という選択肢を選べば大丈夫です。

ただ、裏ルートを通る場合メインストーリーを進めるための要求ステータスが通常よりも高くなることだけは覚えておいてください。

所謂ハードモードのような扱いなので、しっかりと育成計画を立てた上で攻略しましょう。

そして先ほどさらつと流しましたが、もちろん“ぎ・はむきたす”は解散します。

共通ルートを通ろうと裏ルートを通ろうとこれは覆せません。そもそもリヨウがフリーでない<sup>と</sup>結束バンドが結成されませんし。

それでも彼女らの好感度を上げるのは、バンドの解散理由を色恋沙汰に変えるためですね。

普通なら原作と同じように方向性の違いで離散することになりますが、恋愛による不和でバラすと半年ほど早く離脱することができま<sup>す</sup>。

前々から言っているように完走した所で獲得できるスキルは使いものになりませんし、別段これといって長居する理由もありません。その分早くスカウトを受ける方がうまあじです。

——さて。育成パートに関する話はこの程度でしょうか。もしも想定外のイベントの発生や重要な事柄があれば補足しますが、基本的にはこのまま共通ルートまでイベントを垂れ流しながら突っ走ろうと思いません。

次にこうして解説を挟むのは予定通りなら裏ルート分岐時ですね。それでは倍速です。

## 結束バンド集会

「ということがあって、俺はリヨウのバンドに参加することになった」  
「え」

「うん。あと今週末に駅前路上ライブもやる予定」

「えっ?」

「そうそう路上ライブ……いやそれは初耳だが」

「ええ……?」

夕飯時のファミリーストランにて。

目の前で交わされる俺とリヨウのやりとりに、虹夏はころころと表情を変えて見せた。

具体的には補習中に起きたことや俺がぎ・はむきたすに参加したことを話していたのだが、こんな顔をしている原因は十中八九後者にあるだろう。

なにせ補習を受けておらず、俺たちと居合わせなかった彼女にとってはあまりにも唐突な話だ。驚いたり戸惑ったりするのも無理はない。

それでもこのタイミングで打ち明けることにしたのは、いつか三人でバンドを作ると言った手前、情報共有なしに活動するのは不誠実だと思っただからだ。

星歌さんに釘を刺されたことだし、その辺りはきちんとしなければならぬ。

「とりあえず路上ライブについては後で話し合おうとしてだ。まずは虹夏、相談もなく俺たちだけ先にバンドを組む形になったのを謝らせてほしい」

俺は虹夏の顔色をうかがいながら話を切り出した。

多少の文句は出てくるものと覚悟していたのだが、存外彼女の表情はけろっとしたもので。

「あ、ううん。それは全然良いんだけど。リヨウの話だとき・はむたきすって結構本格的に活動してるバンドだよな? オーディションとかなかったの?」

「ああ、あつたな。けど——」

そんな態度に今度は俺が呆気に取られる。そうして言葉に詰まっている間にリヨウは「当然満場一致で合格」と続きを紡いだ。

虹夏はそれを受けて指先だけで小さな拍手をする仕草を見せる。彼女の動きに合わせて揺れるサイドテールに目を引かれた。

「へ〜！　すごいじゃんカンナくん！　……でもなんでリヨウがドヤ顔なの？」

「私も推薦者として鼻が高い。プロデューサーとしての才能が買われるのも遠くないと見える」

「ああ、これアレだね。後方腕組み理解者面山田」  
「なんだよその造語」

軽口を叩きながら微笑む。こうして三人でくだらない会話をするのも久々で楽しかったが、まだ本題が終わっていない。

脱線しかけた話の筋を元に戻すように、二、三度咳払いして言った。

「ひとまず、虹夏は俺がぎ・はむきたすで活動をすることに異論はないってことでいいか？」

「いやいや、あるわけないでしょ！　カンナくとリヨウと一緒にライブやってるの見てみたいし、二人がああの約束を忘れるわけないって分かってるから！」

手放しの信頼がこそばゆい。思わず目を逸らしながら頬をかいだ。

「ありがとう。そう言ってもらえると救われる。埋め合わせってのも変だけど、この恩は必ず返すよ」

「お、恩なんて大袈裟だなあ」

虹夏は苦笑しながら言った。

「カンナくんは変なトコ気にしすぎだよ。私、二人が他所でバンド組んだくらいで機嫌悪くするような重い女じゃないよ？」

「ああ、悪い。別にお前のことをそんな風に思ってるわけじゃなくてさ。バンドも交友関係もバランスよくやっていきたいから、もし俺にやって欲しいこととかあれば言ってくれただけ」

「そっか。じゃあ、そういうことなら二つだけお願いしちゃおっかな」  
指を組んで躊躇うような仕草。何度かチラチラと横目でこちらを

見た後に、意を決して口を開く。

「まずひとつめなんだけど……できれば補習が終わった後も今の習慣を続けさせてほしいんだ」

「……習慣？」

曖昧に濁した点を目ざとく見つけるリョウ。そんな彼女の問いに、今度は虹夏が目を逸らした。

「べ、別にリョウには関係ないでしょ！ 聞いたって面白いことなんて何もないし！」

「……カンナ」

「ん」

名前を呼ばれるのと同時にリョウからのアイコンタクトに気付く。こと虹夏をイジる際の連携において、俺とリョウを上回る人間はいない。

俺は領きながら、問題にならないであろう範囲の事実を暴露した。

「ざっくり言うと、のっぴきならない事情があつてこの間から毎朝起こしに来てもらつてる」

「ちよつとカンナくん!？」

「俺たちの仲で今さら隠すほどのことでもないだろ」

「そこは隠そう!? 誤解が生まれるから!」

まるで蒸気が出そうなほど顔を紅潮させた虹夏が抗議の声を上げる。

リョウはそんな彼女に悪い笑顔を向けた。

「ぶっ。重い女」

「重ッ!? ……や、山田ア!」

調子はずれの声で叫ぶ。

流石は『イジった時最も反応が面白い女ランキング』（保浦・山田調べ）五年連続一位の女だ。取り乱した時の愉快さで右に出るものはない。

ずっと見ていたところではあるが、しかしここは公共の場。騒ぎすぎるのもよろしくない。

「はいはい落ち着いて。人の目があるから」

「虹夏、ステイ」

「正論だけど二人に言われる道理はないよ！」

虹夏を宥めて落ち着かせながら、俺は運ばれてきたフライドポテトを差し出した。

彼女が唇を尖らせたままそれを啜えるのを見届けて笑いかける。まるで鳥に餌付けしている気分だ。

「ま、どうせウチには俺しかいないし、虹夏が来たい時にいつでも来たらいいさ。朝でも夜でもな」

「……うん！」

「私もお腹が空いたら行く」

「それは自分の家に帰れよ」

なんでわざわざ俺の家までたかりに来るんだ。この歳にしてヒモ精神が完成しきつてないかコイツ。

思わず笑いながら虹夏に続きを促す。

「それで、ふたつめのお願いってのは？」

「あ、うん。これはちよつと先の話になるんだけど」

虹夏が真っ直ぐにこちらを見据える。その視線は先ほどまでとは打って変わって真剣そのものだ。

「来年の文化祭、私とバンド組んでくれないかな」

それに対して俺とリヨウは互いに顔を見合わせて言った。虹夏に協力する際の連携において、俺とリヨウを上回る人間はいない。

「当然」

不敵に笑いながら再度虹夏に視線を戻す。

こうして仮称『結束バンド』のファーストライブは、ひとまず一年後の秋に決定した。

## 少女との邂逅

なんやかんやあって正式に路上ライブを催すことが決定し、今日はその当日。

俺たちは炎天下の駅前広場にて準備を進めていた。

「ざっと配置してみたけど、こんなもんでいいか？」

「うん。手伝ってくれて助かった。あとはこれを置いたら完璧」

「空き缶？ そんなもん何に使うんだよ」

「投げ銭を入れてもらうためだけだ」

「ああ、そう……何というか、お前は金のことになると本当に抜け目がないな」

「そんなに褒めても何も出ない」

「皮肉から賞賛を見出すな」

首周りの汗をタオルで拭いながらリヨウのブレない言動に笑う。

負荷のかかった上腕を伸ばし、軽く肩を回した後。俺は運搬を終えた二人分の機材を横目に彼女の方へと向き直った。

「せっかく路上ライブをするならフルメンバーでやりたかったな。俺が加入してから初めて人前に出て演奏するわけだし、雰囲気というか……空気感というか。そういうものを見ておきたかった」

「他の二人は予定があるみたいだし仕方ない。それに今日はあくまで次に箱でやるライブの宣伝が目的だから考えすぎなくていい。こんな風に肩の力抜いて」

「いくら何でも抜き過ぎだなそれは」

脱力しきってフラフラとよろけるリヨウの襟首を掴む。酷使した腕がおよそ人間一人分の体重がかけられたことよって小刻みに震え出した。

「腕、大丈夫？」

「ご心配どうも。出来れば腕をつつくのをやめて一人で立ってくれるとありがたい」

「ん」

存外素直に直立したりリヨウを手離す。すると彼女は俺の腕を一瞥

して言った。

「ライブまで時間あるしちよつと日陰で休んだ方がいい。私はそのコンビニでお昼買って来るけど、カンナもおにぎりとかでいい?」

「ああ。助かる。それで、その手は?」

「……お金ください」

「そうだと思つたよ」

財布から千円札を取り出してリョウに手渡す。

この間新しいベースを買ったとか言っていたし、大方そのせいで所持金が底をついたのだろう。

「この恩は忘れません。来月絶対に返します」

「はいはい。期待せずに待つてるよ」

そんなやりとりをして彼女の後姿を見送った後、俺は日除けの下に設置されたベンチに向かった。

「うおお……生き返る……」

脱力して背もたれに身を預けると、自覚していなかった疲れがどつと押し寄せてきた。

日除けの天面から降り注ぐミストシャワーが火照った身体を冷やしていく心地よさに死にかけの化け物みたいな声が出ってしまったが、許してほしい。

「多少運動するようになって体力が付いたとはいえ、この気温での肉体労働は流石に応えるな」

虚空に向かつて呟く。それは宛先のない独り言だったはずだが、しかし背後から何者かが肯定した。

「うんうん。お疲れ様! えいっ!」

「——は? って冷たアツ!」

同時に首元に冷たい筒状の物があてがわれる。あまりに突然のことであったから、俺は大声と共に飛び上がったしまった。

「あつはは! 引つかかった!」

「に、虹夏か……心臓が飛び散るかと思った」

「飛び出すじゃなくて?」

「そうとも言う。まあどつちも同じようなもんだろ」



「全然違うよ。はい、これあげる」

言いながら、虹夏は俺の首に当てていたスポーツドリンクを手渡して隣に腰かけた。

「ありがとう。まだライブには早いけど、わざわざ差し入れするために来てくれたのか?」

「うん。今日暑いからちゃんど水分摂ってるか心配になっちゃって。ところでリヨウは一緒じゃないの?」

「さつきちようどコンビ二行ったとこ」

「ありや。行き違っちゃったかあ」

パキリ、というペットボトルの封を切る音。その中身を少し飲んで息をつくど、虹夏はこちらに笑いかけながら言った。

「大丈夫? 緊張してない?」

「意外といつも通り。虹夏が来てくれたからかも」

「もう、またすぐそうやって適当なこと言って……誰にでも言ってるんじゃないだろうな?」

「ご想像にお任せします」

悪戯っぽく笑うと虹夏はため息をつく。しかしその後気を取り直したように表情を戻すと、俺を応援してくれた。

「今日のライブ、楽しみにしてるね」

「それなら期待に答えられるように頑張らないとな」

それからリヨウが合流し、三人で昼食を摂り、三十分くらいが経過した後。

ライブ開始の予定時刻となって、俺たちはリハーサルがてら適当な曲をインストで流していた。

時折周囲に意識を向けてみると、思っていたよりも足を止めて見えてくれる人が多い印象だった。

まだ慣らしの段階ではあるが、既に十人弱のギャラリーがいる。

休日の昼頃という時間的余裕のある人間が多い時間帯を選んだのが功を奏したらしい。

当然リヨウもそれには気付いており、彼女はこちらに合図を送りながら言った。

「カナナ。この曲ワンコーラスで切り上げてライブ始めよう。もう結構人が集まってる」

「了解。そういやMCはどうするんだ？」

「適当にやっておいて」

「へいへい。そんなことだろうと思ったよ」

演奏が終盤に入った所で、目を閉じながら息を深く吸い込む。

指を動かすために割くりソースは最小限に。意識を極限の集中状態へと。雑踏の気配、五月蠅いセミの声。これらを己の内から排斥。

演奏を終えるのと同時に、俺は目を見開いてマイクのスイッチを入れた。

「お集まりいただきありがとうございます。俺は、ぎぎ・はむきたす」というバンドでG t. V o. をしている保浦。そっちはB a. と作曲担当の山田です」

まばらな拍手が起こる。その中で一際テンションの高い虹夏と、少し離れた所に星歌さんらしき人影が見えて少し頬が緩んだ。

日程が決まったタイミングで星歌さんに声をかけた時には『予定があるから行けない』なんて言っていたはずだが、相変わらず素直じゃない。

「今日は俺たちのバンドを少しでも知ってもらえたらと思ってここに来たんですが……生憎と大勢の前でベラベラ話すのは不慣れなものでして」

リヨウを一瞥しアイコンタクトを取る。準備ができたことを確認すると、俺はオーデイエンスを見据えて不敵に笑った。

「そんなワケで、まずは一曲自己紹介代わりに聴いていってくださいな」

不在のドラムに代わって、スニーカーのつま先でタイルを叩いてリズムを取る。

リヨウは肩の力を抜いていいと言ったが、どうせやるなら本気でやるさ。

見ていろアンタら。今から保浦・山田がその感性を破壊し尽くしてやる――。



「たくさんの声援ありがとうございます。来月はここでライブハウスでライブをする予定なので、見かけたら是非遊びに来てください」

予定していたセトリを終えると、俺たちの前にはちよつとした人集りができていた。

まばらだった拍手も今は途切れることなく聞こえていて、少し耳に痛いくらいだ。

虹夏と、ついでに遠くで腕を組みながらこちらを見ている星歌さんに軽く手を振って、マイクのスイッチを切る。

それと同時に疲労感が全身を襲った。

「ふう……お疲れ、リョウ」

「うん。カンナも」

アンプの電源を落とし、シールドやケーブルの類を片付けていく。

その時背後からこちらに駆け寄る音が聞こえて、俺とリョウは振り返った。

「二人ともお疲れ様！ 本つつつ当にすごかったよ！」

「おう。ずっと最前列で見てくださいありがとうございます」

「サンクス」

俺たちの手を取ってブンブンと振る虹夏。

その時視界の端の方に見知らぬ少女が映った。

「あの子、さっきのライブにいた……」

外見から察するに同じ年くらいで、入念に手入れされているであろう赤みがかった長髪が特徴的だ。

少女の方に視線をやると、目を輝かせながらこちらに近づいてきた。

「あの……！ さっきのライブ、とっても凄かったです！ 私バンドのこととかあんまり知らないんですけど、一瞬でお二人のファンになっちゃいました！」

まさに感無量といった様子で彼女はライブの感想を述べた。若干

押され気味のリヨウは近くにいた虹夏の背に半身を隠していたので、代わりに俺が対応する。

「ありがとう。リヨウは分からないけど、俺はファンなんて初めてだから嬉しいよ。名前は？」

言いながら右手で握手を求める。

少女はおずおずといった様子で手を握りながら、名前を教えてくださいました。

「喜多郁代です！ えっと、できれば苗字の方を覚えていただけると嬉しいです」

「喜多ね。覚えた。俺は保浦カンナっていうんだけど……ところで今俺が握らされてるモノは？」

「はい！ 万札です！」

「万札」

一切曇りのない顔で笑う喜多とギャップのある答えに、俺はオウム返しをすることしかできなかった。

喜多から離れて自分の右手を見ると、そこには本当に半分に折り畳まれた一万円札がある。

「そこに投げ銭用の空き缶があったので、これはもう貢ぐしかないって思ってた！」

「え、何それ怖……」

目が本気だった。

バイトができる年齢ならともかく、俺たちくらいの年齢の人間にとつて一万円は大金だ。おいそれと他人に渡せるような金額ではない。

「とりあえずこれは返すよ」

「え。でも——」

俺の言葉に喜多は難色を示した。

背後でリヨウがテンションを上げていることだし、何か適当な理由を付けて納得させなければ。

「じゃあ今度一緒にどっか遊び行こう。金はその時使うつてこと……！」

「い、いいんですか!？」

「ああ。別にバンドやつてるだけで有名人ってわけでもないしき。友人として関わってくれたら嬉しい」

「そういうことなら、また次の機会に貢ぎますね!」

ひとまずは難を逃れられたが、不穏な言葉が聞こえたのは気のせいだろうか。

気のせいということにしておこう。

「カンナ、ナンパしてる?」

「……やっぱりナンパだよねこれ」

「うるせえ」

外行き用の笑顔を湛えたまま後ろから飛ばされる野次に耐える。

こうして無事——かどうかは定かではないが、ざ・はむきたすの路上ライブは終了し、俺たちに貢ぎたがりのファン兼友人ができた。

## 喜多との休日（1／3）

路上ライブからちようど一週間後、再び駅前広場を訪れた俺は往來を眺めていた。

見渡す限り人、人、人。子連れの夫婦や高校生。サラリーマンに地図を手にした観光客——と。まさに人海と表現するに相応しい光景だったが、しかしその中に探している少女の姿はない。

時間を確認するために携帯を取り出すと、表示されたデジタル時計は集合時間の十分前を示していた。

そりや来てるはずがない。遅刻常習犯の俺に言わせれば、こうして余裕を持って現着している人間の方がイレギュラーなのだから。

「さて。どこで待つてようか」

座れる場所を探しながら端末をポケットにしまおうとした時、ロインの通知が鳴った。

『絶対喜多ちゃんに手出しちゃダメだからね！』

「……出さねえよ、と。もしかしてこの子、俺のことを性獣か何かだと思ってるっしやる？」

グループチャットに投下された虹夏のメッセージに返信しながら苦笑を溢した。

余程喜多のことが心配なのか、俺が喜多と出かけることになってから虹夏はずっとこの調子だ。

「付き合っても長いんだし、もうちよつと信頼してくれてもいいと思うんだけどなあ……」

流星に少しヘコんだ。確かに喜多を誘った時は食い気味に見えたかもしれないが、あれは何とか万札を返そうと必死だったからだし。

久々に虹夏やリヨウ以外の女子に話しかけられて少し舞い上がったとか、喜多が割と好みのルックスをしてたとか、あとめちやくちやいい匂いがしたとか、そんなことは少しも思ってたなかったし。

ちよつと変な子だけどころな好意を向けてくれるならワンチャャン仲良くなれるかもしれない、なんて邪な考えは一分たりともなかったし。

「まったくもって他意はなかったな。うん」

一人呟きながら『でもファン食いつてバンドマンっぽくない?』というリヨウのメッセージが目に入る。

それをきっかけに通知の頻度が喧しいほどに高くなったので、俺はスマホを消音モードに切り替えた。

「カンナ先輩!」

ちょうどその時、遠くから喜多が手を振りながら小走りで見ええてくるのが見えた。

「ごめんなさい。待たせちゃいましたか?」

「全然。むしろ到着早くて驚いてるくらい。もしかして、俺と出かけるのがそんなに楽しみだった?」

「はい! それはもう! 昨日の夜は全然眠れなかったし、今朝なんて五時に目が覚めたくらいですから!」

「……いやもつと寝とけよ。あと近え」

軽く揶揄うつもりが、眼前にまで迫った喜多の勢いに気圧されてしまふ。

俺は軽く後ずさりながら今日の予定を尋ねた。

「えっと。プランは任せてくれて言っただけど、どこか行きたい場所でもあるのか?」

「はい。実は最近このあたりに新しいカフェができたみたいで。ここなんですけど——」

肩を寄せて携帯の画面を見せてくる喜多に一瞬眉が上がる。柔軟剤の匂いが鼻をくすぐるような距離感に心臓がうるさくなるのを感じながらそれを覗き込んだ。

「……ああ。入ったことはないけど聞いたことあるな。確かパンケーキが美味しいとかなんとか」

「そうなんです! 私もまだ入ったことがなくて、もし先輩が甘いもの大丈夫なら一緒に行きたいなって!」

「いいね。こっちは見えて甘いものは好物なんだ」



「先輩って、案外写真撮る時ノリノリなんですね」

「ん、そう?」

ストローから口を離すのと同時、アイスコーヒーに入れられた氷がカランと清涼な音を立てる。

完食したパンケーキのプレートの隣に差し出された喜多のスマホには、つい先ほど二人で撮った写真が表示されていた。

「ふむ。何というか、我ながらあざといな」

「本当ですよ。うくん、下手な女の子よりも可愛いのが恐ろしいわ……」

顎に手を当てながら画面を注視する喜多。

その真剣な表情からして間違いなく褒められているんだろうが、男として「可愛い」という評価は喜んでいいものか悩ましい所だった。

「私が高カメラを起動した時にはもうポーズを取ってましたけど、先輩って結構撮られ慣れてますか?」

「それなりかな。俺、友達少ないから一緒に遊んだり出かけたりするのってリヨウと虹夏くらいなんだけど、たまに虹夏が写真撮ろうって言うってくるから」

「なるほど。道理で」

喜多は合点がいったというようにぼん、と拳を反対の手のひらに乗せて笑った。

「というか、写真慣れしているのは俺よりもむしろ彼女の方ではなからうか。」

あれは明らかに自分の「盛れる」角度を熟知している動き方だったし、何より注文した品が揃ってからスマホを抜くまでのスピードがめっちゃくちゃ早かった。

「そういう喜多こそ写真撮るの好きだろ」

笑いかけると喜多は目を輝かせた。

「はい! 楽しかった思い出って時間が経つと段々薄れていっちゃいますけど、写真に残しておけば思い出すきっかけになるんじゃないですか。だから私は撮るのも撮られるのも好きです!」



「へえ。なんかいいな、それ」

俺がそう言うと、喜多は「そうですかね」なんて眩きながら少し照れくさそうに笑った。

そんな表情に嗜虐心を煽られた俺は、いつもそうするように軽い悪戯を思案する。

「撮られるのも好きならさ、俺の携帯で喜多の写真も撮ってもいい？」

「はい！ もちろんお好きだけどうぞ！ 十枚でも百枚でも、いくらでもお付き合いますよ！」

「……意外なりアクションだし勢いが凄い」

なんかこう、俺が想像していたのはもう少し恥ずかしがるような反応だったのだが、その期待に反して喜多は身を乗り出すように撮影を承諾した。

こちらが言い出した手前「冗談でした」なんて茶化すのも決まりが悪くて、ポケットからスマホを取り出す。「先輩が私を写真に残してくれるなんて感激だわ！」とはしゃぐ喜多に息をついて口元を綻ばせながら、カメラアプリを起動した。

「可愛く撮ってくださいいね？」

「おう。任せとけ——っ」と

パシヤリ、とシャッター音が響く。

フィルターなんてかかっていないノーマルカメラを通して、喜多の笑顔は愛らしかった。

「……いきなりこんなことを言うのもアレだけど、喜多って相当可愛いよな」

「へっ!? う、嬉しいですけど、本当にいきなりじゃないですか!？」

画像を見ながら率直に感想を述べると、今度こそ喜多は期待した通りの反応を見せた。

「ごめんごめん。でも冗談じゃなくて本当にそう思ったんだよ。ぱつと見ただけでもオシヤレに気を遣ってるのが分かるし」

「そ、そうですかね。……ありがとうございます」

俯きがちになった喜多の赤っぽい耳を一瞥し、俺は彼女の全体像を捉えるように見た。

第一印象でも感じたことだが、喜多の髪は手入れが行き届いていて枝毛なんて一つも見当たらない。その上清楚な服装や薄く施されたメイクなんかも相まって、一つ年下ながら同級生よりも垢抜けて見える。

「うん。やっぱり可愛い」

そう呟いたことで感情の臨界点を迎えたのだろう。

喜多は話題を逸らすためか遠慮がちにこちらを見ながら言った。

「そ、そういう先輩もオシャレな服を着ていますよね。ファッションとか興味あるんですか？」

「いやいや。俺はただ——」

母親の着せ替え人形になっているだけだよ、と。

危うく日常会話と同じ調子でとんでもないことを口走りそうになったことに気付いて、俺は閉口した。

「俺はただ、母親が選んだものを着ているだけだよ」

「……そうなんです。センスのいいお母さままで羨ましいです！」

俺が言葉に詰まったことで何かを察したのか、喜多はそんなありきたりな返答をして笑った。

「ありがとう。あの人もきつと喜ぶよ」

思ってもいない言葉を口にしながら、繕った笑顔の裏で歯を食いしばる。

喜多の気遣いは本当に暖かくてありがたかったけど、俺の頭の中にはかつて愛していた母親の顔が像を結んで、支配したはずのノイズが走っていた。

ただただ、それが不快で仕方がなかった。

## 喜多との休日（2／3）

ちやぱん、と水を揺らす音が三畳ほどの空間に響く。湯気が立ち昇る浴槽の中、ふと頭に浮かんだのは喜多の横顔だった。

振り切ろうとすればするほど彼女の声が、彼女の笑顔が脳裏を過ぎる。それはささくれた指の皮を弄ってしまう時や荒れた唇に触れてしまう時の感覚に似ていて、一度気になりだすと中々治まる気配がない。

まるで恋煩いみたいだ。

そんな自嘲にも似た薄笑いとともに、俺は水を含んで重くなった前髪をかき上げた。

「アイツには悪いことしちゃった」

鼻から下を湯舟に沈めながら呟く。

本来なら丸一日一緒に過ごす予定だった休日は、俺に気を遣った喜多が『ちよつと早い気もしますけど、今日の所はお開きにしましょうか』なんて名残惜しそうに言ったことで半日程度で終わってしまった。

言うまでもないことだが、原因は俺が母親を思い出してしまったことだ。

アレの話をした後、喜多はしきりに俺の顔色がよくないことを心配していたから間違いない。

「……『楽しみにしてた』って言ってくれたのにな」

前日の夜は眠れず当日の朝も早く目が覚めたと言って笑う喜多の笑顔が網膜に焼き付いている。

面と向かってそう言われたときはもちろん嬉しかったけど、今はいつそ嘘であってほしいと思った。

もしそうなら、こうして罪悪感に押しつぶされそうになることもない。

彼女の無邪気さと、一瞬でも『もし喜多と会っていないければ』と後悔してしまった自分の醜悪さを比べることもない。

「……馬鹿が。全部自分のせいだろうか」

樹脂素材の壁に反響する声は普段よりも半オクターブくらい低い。「いい加減断ち切らないといけないのは分かっているだろ。お前がどんなに思い悩んだって、もうあの人たちは帰ってこないんだよ」

父さんと母さん  
己に言い聞かせる。歯を食いしばる。脱力し俯く。

そうして額から滴り落ちた雫が、水面に映った俺の輪郭を揺らした。

「……はあ」

それを見ると少しのきっかけで波風が立つ脆弱な心と向き合われるような気分がして、たまらず天井の方へと目を逸らす。

フアスナー付きのプラスチックバッグに入れたスマホが鳴ったのは、それとほぼ同時だった。

「——喜多からだ」

噂をすれば影が立つ、とか言ったつけ。

もちろん実際に喜多が姿を現したわけではないが、ポップアップ通知には今日彼女と食べに行ったパンケーキのアイコンが表示されていた。

トーク画面には『大丈夫ですか?』と俺を心配する文面と一緒に出掛けられたのが楽しかったという旨の感想が。——そしてたった今、そこにツーショットの写真が添付された。

「はは。ホント、俺にはもったいないファンだよ」

少しだけ心が和らぐ。

もし喜多と話せたらもつと楽になれるのだろうか。

そう思った俺は夜更けであることとか、相手が何をしているかとか気に掛けることもせず『十分後くらいに少し通話しないか?』と送信した。

「ま、聞くだけならタダだしな……」

言い訳じみたことを呟きながらバスタブのヘッドレストに寄りかかる。

何をするでもなく、俺はただ送信時間の横の空白に既読の二文字が付くまで画面を見つめていた。

それから十秒と経たない頃だったと思う。

既読が付いてすぐに了承のメッセージと可愛らしいスタンプが送られてきたのを見て、俺は飛ぶように脱衣所へと駆け込んだ。



「こんな遅い時間に通話したいとか言ってますまん。もう寝るところだったか？」

『いえいえ！ あと一時間くらいは起きているつもりだったので、全然気にしなくて大丈夫ですよ。私も先輩ともう少しお話ししたかったですし』

「なら良かった。実は今日のことを謝りたくてさ」

そう告げると、喜多は『何のことですか？』なんて少し困惑気味に言った。

「今日の昼過ぎ、俺に気を遣って予定より早く解散にしてくれただろ。わざわざプランまで考えてきてくれたって言ったのに、無駄にしちやつてごめん」

『そのことなら謝るのは私の方ですよ。先輩の調子が良くないことに気付かずに色々な場所に連れまわしちゃったので。ごめんなさい』

無辜の謝罪に良心がちくりと痛む。俺はともかく喜多が罪悪感を覚えるのはお門違いだ。

誤解を解くためにはやはり本当のことを話す必要がある。そう思うと母親の顔が勝手に浮かんでくるが、頭の隅に押しやりながら努めて明るい声で話した。

「いや、喜多は本当に悪くないんだよ。体調は万全だったし、もちろんお前と過ごすのも楽しかった。だから嘘でも誇張でもなく、悪いのは全部俺なんだ」

『どういうことですか？』

喜多の問いに一瞬だけ沈黙する。

果たしてこの過去は出会ったばかりの彼女に打ち明けていいものかと、逡巡が走ったのだ。

結論として叩き出したのは、事実のさわりだけを話すことだった。

「端的に言うなら、俺の顔色が悪くなったように見えたのは外出中にトラウマを思い出したせいだ。責任は俺にある。言いたいことはこれに尽きるな」

『トラウマ、ですか。その……ごめんなさい。私、こういう時どういう言葉をかけていいか分からなくて』

「謝ることなんてないよ。出会って間もない人間の重い過去なんて、誰だって持て余して当然だ。ただ、それでも喜多には知っておいてほしいと思った」

『それは、どうして……?』

「喜多とは仲良くなりたいたいから。少なくとも、そういう過去を抱えていることだけは伝えたかった。どんなに忌まわしくても今の俺の骨子には違いないしな」

『……カナ先輩』

段々と自分でも何が言いたかったのか分からなくなってきて、どこか言いくるめるような口調になる。

そんな回りくどいセリフを聞いた喜多は、先ほど俺がそうしたように沈黙した。

なんとなく空気が重いように感じるのは、コミュニケーションを得意とする彼女が珍しく言葉を選んでいるような風だったからに他ならない。

『えっと……仲良くなりたいたって言うてくれるのは嬉しいです。私もカナ先輩とはもっと仲良くなりたいたいから。でも少なくともって言い方は、なんだか私を信頼してないみたいで……ちよつとヤです』

『とぅーん』

喜多から初めて否定らしい言葉を聞いた俺は、少し意外に思いながら言った。

『あくまで私の考えですけど。先輩がトラウマの内容まで話さなかったのは、迷いがあったからだと思います。もし昔のことを全部話したら耐えかねた私が先輩を避けるようになるんじゃないか、みたいな』

『……………』

『もう。黙っちゃうのは認めているのと同じですよ』

喜多の言う通り、凶星だった。

まさか表情の見えない電話越しに懸念していたことを見透かされるとは思っていなかったから、一瞬呆気にとられてしまった。

『ねえ、先輩』

「はい」

有無を言わさぬ雰囲気思わず敬語が飛び出る。喜多にこんなしたたかな一面があるなんて、まるで思ってもみなかった。

『あまり私を侮っちゃダメですよ。私は先輩のファンで先輩の友達なんです。悲しい過去の一つや二つで先輩を遠ざけたりしません』

断言してから『まあ、会ってから日が浅かったり惚れっぽかったりする所は信用できないかもですけど』なんて苦笑する。

そんな喜多の言葉は少しだけ頼りなかったけれど、今まで耳にしたどんな慰めの文句よりも深く俺の胸に突き刺さった。

『——だから、私に教えてくれませんか？先輩が抱えてる傷のこと。力になるって断言はできませんけど、話すだけで楽になることもあると思います』

「ああ。……そうだな」

もしかしたら俺は、喜多がこう言ってくれることを期待して彼女に電話をかけたのかもしれない。

幼馴染みの虹夏やリョウではなく、身近な大人の星歌さんでもなく。出会ったばかりの喜多に救いを求めた理由は分からないけれど。

とにかく、俺は初めて過去を包み隠さず告白した。

## 喜多との休日 (3 / 3)

「――まず、俺は俺のことが好きな人間が好きだ」

そう切り出すと、喜多は少し戸惑ったような反応を見せた。言外に『……これって必要な情報でした?』と言いたそうな彼女をよそに話を続ける。

「そう考えるようになったきっかけは三年前に父さんが死んだことだと思う。俺が今抱えてる不幸は、全部ここから始まったから」

言いながら、視界の端で父さんのギターを捉える。透き通る海のようなエメラルドグリーンが、どうしてか今は目に痛かった。

「とりあえず、今から俺の過去を掻い摘んで三つだけ話す。少しでも聞くのが辛かったら言ってくれ」

そう断って瞑目する。

喜多は何も言わない。俺はそれを彼女なりの覚悟と受け取って口を開く。

「父さんが死んで、最初に変わったのは母さんだった。昔は鬱陶しいくらいに溺愛されていたんだけど、精神を病んでヒステリーを起こすようになったんだ」

息をのむ音が電話越しに聞こえた。

その顔を見ずとも、喜多の表情に緊張が走っていることが感じられる。

俺は「異変があればすぐに話をやめよう」と胸に決め、彼女の息遣いに注意しながら再び口を開いた。

「ネグレクトは当たり前。機嫌が悪けりや殴られたし、酷い日は階段から突き落とされた。その上外傷が目立つ時には軟禁だ。もちろんその間は学校にも行けなかったから、一週間欠席なんてことはザラだった」

『それって、学校の先生や他の大人は……?』

喜多の声は珍しく尻すぼみになっていた。

普段と調子が違うことに配慮し、努めて穏やかな声と口調で返事をする。



「止めなかった……いや、止められなかったのが正しい。問題を抱えていることには気付いていただろうけど、母さんは証拠を隠すのが上手かったから。虐待までされているとは考えなかったんだと思う」

実際、当時の担任は『何か悩んでいることはあるか』としきりに聞いてくれていた。

あの時首を横に振らずに助けを求めていれば違った未来があったのかもしれないが、当時の俺はどうもそんな気分にはならなかった。きつとその時点ではまだ母への情が残っていて、見るからに憔悴している彼女をこれ以上苦しめたくなかったんだろう。

まあ、結果として誰よりも自分が苦しんでいるのは笑い種だけど。「それから少し時間が経って、友達がいなくなつた。どこからか父親が死んだって噂が流れて、学校の中で何となく俺を避ける空気が蔓延しはじめたんだ。大方、保護者から『保浦寛和に関わるな』とでも言われた奴らがいたんじゃないかな」

『そんな、どうして……！』

「片親ってだけで家庭環境、ひいては子どもの人格に問題があるって考える親は少くないんだ。それが本当かどうかはともかく、自分の子がそんな人間と関わってほしくないって考えるのは普通だろ」

憤る喜多を宥めながら、淡々と事実だけを述べた。

こんな風に冷静でいられたのは、辛くても納得する余地があったからだ。現に家庭環境は崩壊していたし、俺の人格だってとても優れているとは言えない。

何より虹夏とリヨウはずっと一緒にいてくれたから、この件で受けた痛みは他の二つよりもはるかにマシだった。

「んで、最後。母さんが新しい男を作った。これをきっかけに母さんの精神状態は改善されていったから、最初は悪い気はしなかったんだが……」

言いながら在りし日の記憶を呼び起こす。真つ暗な部屋に安置された一枚の紙切れが脳裏に浮かんだ。

「結局、それで救われたのは母さんだけだった」

小綺麗な便せんに認められたようなものではなく、適当に千切ったメモ用紙の上に汚い走り書きで記されたメッセージ。

誰かから逃げるように書いたであろう手紙の要旨は『私は普通の幸せの中でしか生きられない』『貴方は強いから一人でも大丈夫』『成人するまで必要な金は出す』という書き置きにしたって勝手極まりないものだった。

「再婚したのと同時に、母さんは俺を置いて家を出て行ったんだ。それからずっと一人暮らしをしてる。かれこれもう一年半近くになるかな」

だから俺は母親と孤独が嫌いなんだ、と。

口にする握った拳の内側に熱を感じた。その正体は爪が食い込んで出来た四つの細い傷口だった。

「そんなワケで、俺は俺のことが好きな人間が好きなんだよ。一緒にいれば嫌なことを忘れられるし、そもそも俺のことを好いてるだけで希少価値がある」

最後は少し冗談っぽく笑ってみせたが、喜多はくすりともしない。自分がこんな話をしたせいで重い空気になってしまったとはいえ、なんだかいたたまれない気分になって早口で捲し立てた。

「うん。なんかアレだな。三年くらい苦しんできたけど言葉にするとチープというかそこまで気にするほどのことでもないというか。いや、まさか話したただけでここまで楽になるなんて思ってもみなかった。ホント喜多には感謝しかないし脱帽通り越して今すぐスキンヘッドにでもしたい気分だよ。それに比べて俺はこんな下らないことでずっと悩んでて——」

『……下らなくなんて、ないです』

「え」

思わず素っ頓狂な声が出た。

『確かに先輩の過去は三分もあれば簡単に話せるような内容かもしれませんが、少なくとも当事者の先輩にとってはそうじゃないですよね?』

「……まあ」

『だったら、たとえ嘘でも “下らない” なんて言わないでください。辛いつて言つてください』

聞こえのいい言葉が諭すような声で囁かれる。

まるで俺がまだ何かを隠していると確信しているような、そんな口ぶりに聞こえた。

『私にはお友だちがいなくなつた経験はありません。だから先輩の気持ちを全部理解してあげる、なんてことはできませんけど』

それでも、と喜多は笑つた。

『カンナ先輩を一人にしないことはできますから。先輩から離れていつてしまった人の分まで、先輩のことが好きだつて言つてあげることはできますから！』

「それつて、俺が過去を振り切れるまでずつと？」

『もちろんです！ 辛い時はもつと他人ひとを頼つてください。別に私じゃなくても、リョウ先輩や伊地知先輩だつていいんです』

試すような意地の悪い問いは一蹴された。それどころか、彼女の言葉は俺の弱さすらも肯定するもので。

きつとそれは俺が一番欲していた言葉だつた。

『先輩と先輩のことが好きな人たちのために、もつと周りに甘えてください』

喜多の声を聞いて、俺は精神が前後不覚に陥つたような思いがした。

俺は最初、トラウマを抱えているという事実だけを喜多に話すつもりだった。彼女との外出を潰してしまったのだから、それを隠したままでは不誠実だと思つたから。

でも、喜多はそれを看破した上でしつかりと内容まで話すように言つた。

俺が懲りずに過去にあつた出来事だけを話せば、今度は裏にある感情まで見透かされて、遠回しに『本音で話せ』とまで言われる始末だ。

喜多はコミュニケーションを通して、俺よりも深く俺を理解している。

何もかも看破されてしまっているから、何を話せばいいのか。何が正しくて、何が間違っているのかすら分からなくなってしまった。

だから俺は、この理性が壊れてしまっている内に全部吐露してしまおうと、そう考えた。

「じゃあ、ちよつとだけ」

『はい。どうぞ』

俺が呟くと、喜多は慈愛に満ちた声で言った。

「——本当は全部辛かった」

『……はい』

それを皮切りにして、三年間貯め込んだ感情が濁流のように押し寄せてくる。

「ちよつと冗談っぽく茶化した部分もあったけど、正直さつき話したことは全部キツかったんだ。自分でも『仕方ないことなんだ』って騙し騙しやってきた。でも、俺が悪いことなんて何にもなかったんだよ」

『はい』

「父さんが死んで、母さんが病んで、環境ばかりが勝手に変わっていった。大人ぶって平気なフリしたけど、ホントは殴られるのも友達がいなくなるのも嫌だった。……一人に、なるのは、嫌、だった」

視界が滲む。呼吸すらもままならない。空いた手で目元を拭うと、その甲が濡れて熱くなった。

「……ごめん。いったんちよつと深呼吸させてくれ」

『ゆっくりでいいですよ。ずっと待ってますから』



その言葉通り、喜多は俺がせき止めていた感情を吐き出し終わるまですつと通話を繋いでくれていた。

それこそ寝る予定だった時間を過ぎてもお、少しも文句を言うことなく付き合ってくれた。

通話が終わった後も、俺の頭の中には最後に交わした言葉が何度も

行き交っている。

『おやすみなさい、カンナ先輩。——あ。一応最後にちゃんと言っておきますけど、私も先輩のこと大好きですからね』と。